

ぶどうの木

第 19 号



基督伝道隊
八幡前田教会
大濠公園教会
戸畑教会

目次

巻頭言	榎本利三郎	1	山に登る	伊規須泰子	24
八幡空襲	榎本利三郎	2	I am walking	貞 サユリ	25
我が思い出(一)	鈴木 一幹	4	自転車盗難事件	畠山 英子	27
いつのまにか三〇年	青木 淳一	6	神のみめぐみ	菊池 修	29
悔い改め	石田 秀子	8	祈りの中に生かされて	岩井芙美子	29
小さな祈りに答え給うて	内田 松枝	10	収穫	緒方とみ子	32
伝導礼拝での証	匿名	11	「断腸」の記	古木 勝	35
私の受洗	矢儀 説子	13	続・「断腸」の記	古木 勝	39
主のみ恵みを思う	上野 米子	14	同信の友への手紙	津留崎浩行	42
神様の約束	平野 博	16	納骨を感謝しまして	光成 清子	43
祈り	石田 秀子	18	野村さんを偲んで	広田 寿	45
OB会の世話人となりて	久保田宮子	19	さようなら、野村小羊先生	大田 敏夫	46
OB会を終えて	久保田宮子	20	主によって生かされる生涯の幸	野村美恵子	50
仕事とわたし	松山 智昭	22	思い出	上島 仁子	63
			おじいちゃんのない敬老の日	飯田 恵	64
				飯田 香	

巻 頭 言

榎 本 利三郎

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。」

(ヨハネ一五・五)

ぶどうの木につながった枝である私達は、今年も、大きな枝、小さい枝、太い枝、細い枝、それぞれに主は豊かに実を結ばせて下さいました。一九号に成長して、夫々に異なった味わい深い果実を結ばせて下さいました。

明るい陽射しの中で、食後の団欒の中で、通勤の車の中で、就寝前の灯火の下で、よく味わって、主を崇めていただき度いと思います。

今は寒さのきびしい時ですが、机の上のプリムラは新鮮な緑色の葉を輝かせ、可憐なピンクの花々が、春近しと明るく語りかけて居ります。やがてぶどうの木も新しい芽を出し枝を繁らせ、多くの果実を結び、農夫で在す父なる神に喜んでいただけるでしょう。

一九九三年一月一〇日



八幡空襲

榎本利三郎

その日はカラッと晴れて、空いっぱい太陽になった様な、暑い暑い日であった。

戦争末期で物の乏しい生活であったが、報道管制で、戦争はるか彼方の事で、空襲のうわさは聞くが、その実態も悲惨さも、恐怖も知らず、わが家は平和であった。食糧買出しで体調を崩した家内と生後八ヶ月の長女が肌衣一枚で畳の上に休んで居た。次男の和義は独り静かに遊んで居た。

「ウウ・ウウ」と空いっぱい空襲警報がひびきわたった。ラジオも沈黙している。……何分経っても来襲の心配が無い。他の目標に向ったに違い無い。(今迄に、度々そんな事が有った。)退避準備をした家内も「ヤレヤレ」と一安心と思った時、「ドカン」と大きな炸裂音がした。「オヤ！」と窓から首を出す、と、大きな樽状の物が上空から落ちて来る。(飛行機はもう飛び去って影も形も無い。)途中で炸裂してマッチの軸状のものが、パラパラと飛び散った。その一本一本から火と煙が帯状に燃え上っている。

「焼夷弾だ!直ぐ退避だ!」

家内も身仕度し、幼児をねんねこに包み、道路越しに地下壕へ退避する。

その間も、小型焼夷弾が所かまわず雨の様に降って来る。カチャカチャ、カラカラ、パチパチ鉄工所の作業場の様にやかましい。一本一本の焼夷弾が火を吹き出す。向い側の家は屋根から火柱が立ち登って居る。地下壕も危ない、家内と二・三人の婦人が、恐怖でおびえて、出たり入ったり、オロオロしている。「危い!線路へ走れ!」大声で怒鳴る。

日頃訓練された様に全力で消火に当る。万策尽きて退避を決意、道路迄出ると、目の前を黒煙と火の粉が渦巻きながら流れ、パチパチ、ボウボウ、激しく燃える炎だけが目に入る。「シマッタ!手後れだ!」と立ちすくんだ。

その時、イザヤ書四三章一一二節

恐れるな、わたしはあなたをさがなった。

わたしはあなたの名を呼んだ。

あなたはわたしのものだ。

あなたが水の中を過ぎるとき、

わたしはあなたと共にいる。

川の中を過ぎるとき、

水はあなたの上にあふれることがない。

あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。

の聖言がハッキリと心を捕えてくれました。

そうだ、日頃信頼して居る主が共に居て下さるから大丈夫。シャデラク、メシヤク、アベネデゴを燃ゆる火の中から救い給うたお方を頼みに、消火に使用して居たスコップを手にして、火を吹く焼夷弾をホップ・ステップと飛び越え飛び越え全能者である主の聖手に守られて、日頃、空襲の時の非常退避所として決めて居た製鉄所と鹿児島本線との間にある側溝に辿り着いた。家族の姿が無い。あの炎と煙の嵐に巻き込まれてやられたと思つて力が抜けた。此の目で確かめ様と線路沿いに探す。線路沿いのヒマ畑の葉の間に、見覚えのあるねんねこが見付かった。折角比処迄来てやられたのと思つて剥ぐと「敵機は居ないかね？」と幼児を抱え、次男を脇の下に抱えた家内が尋ねた。次男は余りの恐怖にしばらく声も出ず、まばたきもしなかった。

予定した退避所へ辿り着き、一同無事に守られた事を主に感謝した。町は未だ盛んに火の手を上げて、すごい勢いで燃えて居る。自分の家も目の前で火の手を上げて居る。立派な二階建の家も（当時最高の建物）バラックも二時間で完全に焼け落ちて皿倉山の麓まで見える。

下火になった時、取り出し易い木を引出し、塀に立掛け、焼け鉄板で小屋架けした。小雨も降り出した。幼児に授乳して居る姿を見て、三菱化成、安川電機等に働いて居る人達が心配して、線路上を走って来たが、「赤ちゃんが助かって居る」と安心してゆっくり歩いて行くのが目に焼き付いている。何時間か経って、熱気のこもる町内を巡る。道路には、逃げ切れないで倒れた無数の男女の黒焦げ死体、銃剣をつけた兵士、熱さで防火水槽に飛び込み、水に浸った所はそのまま、出た部分は黒焦げ、馬も仰向けに倒れ、腹はまん丸に、はり裂けそうに成って居る。屋内防空壕に入った人達は、一酸化中毒で眠った様に死んで居た。声をかけると「ハイ」と目を覚ますのではないかと思われたが、手を触れるとズルリと皮膚が剥がれる。蒸し焼きになったのだ。

我が家の西隣に、韓国出身の一家が、貧しいながら平和に暮して居た。主人が夕方帰ってびっくりして、焼トタンを剥いで見ると家族四人の黒焦げ死体が出て来た。総ての音が爆撃で消され、閑静とし、日は西に没し、夕焼けが名残をとどめ、夕闇が周囲を覆い、煤ける煙が棚引いて居る。突然静寂を破って、大の男が地上に転がって、両手で大地をパタンパタン叩きながら「哀号！哀号！哀号！……」と叫ぶ。腸をふり絞る声はどこ迄も、どこ迄も吸い込まれて行く。

たった二・三時間の間に、何十年もかかって宮々と築き上げた文化も宝も生命さえも全部灰にして何も残らない。

何と愚かな悲惨な事であろうか。此の事実を忘れて又何処かで、愚かな、無益な戦争をくり返すのでは無いであろうか？

総ての人が主に立ち帰って、戦争なき平和が一刻も早く（イザヤ一章六―九節）の様に成就する様祈ります。

我が思い出（一）

鈴木 一 幹

昭和一八年一〇月三日のことでした。予期していた召集令状がついに来ました。令状に書いてあった内容は次のとおり。

一、入隊先 久留米市「西部第五一部隊（野砲隊）」

二、入隊日 昭和一八年一〇月一〇日午前九時

三、携行品 ①奉公袋 ②洗面具一式 ③下着一式

④所持金五円以内

右以外は、一切所持を禁止する。

※入隊時に本状を門衛に提出すること。

以上が葉書に印刷してあったと記憶している。

母は前々から『あなたがいよいよ入隊するときは、聖書と讚美歌を必ず持って行って！』、と書いていましたが、私が返事をしなかったので、令状到着と同時に更に厳しく持参を迫りました。『必ず持って行きなさい。きっと神様が守って下さるから』と。

丁度その頃は第二次世界大戦の真只中、しかもレイテ作戦を始めとした南方戦線の戦果も思わしくなく、米英を相手に生きるか死ぬかの激烈な戦いの最中で、軍隊に入隊するのに、いくらキリスト教信者としても、聖書・讚美歌を持ち込むことがはたして許されるだろうか、との不安もあり、ちゅうちょしていたわけです。

私は、祖父母を始め、クリスチャン一家に生まれました。家の近くにあったメソジスト行橋教会に、家中の者で毎日曜日には日曜学校に通い、中学生からは禮拜に出席し、湯浅牧師のお話を聞き、信仰を持っているつもりでしたが、いざ入隊を前にして持って行くべきか否かについて毎日苦しみました。

これは、丁度江戸時代にキシタンの弾圧の際に行われた踏絵を踏ませられる時の心境ではないかと思いました。

いよいよ出発二日前になり、意を決して、母の前で荷物をまとめることにし、奉公袋に洗面具と下着一式と財布（小銭で五円）と、最後に聖書と讚美歌を入れました。

今にして思えば、これは信仰があったから持参を決意したのか、あるいは各れ戦死する身なら、母の願をせめて最後にかねて上げようとの考えからか、今でも明らかではありません。横で見ていた母は満足そうに喜んでいました。

出発は入隊日の前の日で、行橋駅頭には町長さん始め沢山の人が日の丸の旗を持って見送って下さいました。

私のほかにも一人の方が同時に同隊に入ることのでめで始めて紹介されました。(その方は後で隊の移動中、戦死をされました。)

久留米の叔父の家に一夜を世話になり、翌朝、叔父・叔母と母とが部隊の営門まで見送ってくれました。門前で別れるときの母の寂しげな顔が、その後もずっと脳裏に焼き付いていました。営庭に集まった入隊者は約四百人余りでした。

しばらくして我々のところに下士官が八人出て来て、その内の一人が前に進み『只今から服と靴と帽子を支給する、前方の被服庫前にそれぞれ山積してあるから自分に合ったものを選んで着るように』、『用意、はじめ』、と号令が掛りました。

四百人が一斉に服や靴の山を目差して走りました。服や靴を自分の体に合わせるのは大変でしたが、どうにか合わせることができました。中には靴の右足分を左足にもはいていた者もいました。他の下士官が『次は今から貴様達を野砲と山砲とに

分けるので四列縦隊に並べ』、との号令で一同は百人の四列に縦に整列しました。

すると『左側の列百人は今日から山砲、右側三列は野砲である。』と、私は幸いにも右列に居たので野砲となった。

なぜ幸いかと言うと、山砲は主として山岳戦に使用のため、運搬には砲を分解して搬送することが多く、馬や人の背に乗せ、担ぐことが席であるから、力仕事をしなかった私には到底耐え得るものではないと思っていたからです。

それから五〇人ずつ八班の編成となり、下士官(班長)の引率で各部屋に収容された。私は第二班で、班長は徳田伍長でした。また二班には教育掛の上等兵一人と一等兵四人が居て各自に寝台の割当て(五尺のわら布団)、整理棚の配布、毛布敷布の配布が行われました。私は早速整理棚の上段に聖書と讚美歌を入れ、下段に洗面具、下着、空の奉公袋を入れました。夕食前に班長や古兵が、全員の整頓状況を見て回りましたが、何も言われず、一先づほっとしました。

食事の世話も全部古兵殿だけでやってくれますので、これで良いのだろうかと心配でした。夕食後、班長より『貴様達は本日より一週間、当隊が大切に扱うお客様である。一週間後には当隊を出て某所の部隊に補充されることになっている。行先は極秘であるので言えない。』との説明があった。

いつの間にか三〇年

青木 淳一

一番気にしていた所持品検査も無いまま一日を終えようとしていた。その時上等兵が来て、『鈴木二等兵は居るか。班長殿がお呼びであるので班長室にすぐ行くように。』とのことで、何事だろうかと気にしながら班長室をノックした。『鈴木二等兵参りました。』『入れ』の声で入室すると、徳田班長は笑顔で待っていて、『固くならんでも良い、その椅子に掛けなさい。』と、ここで君はおれを知らないか？』、『知りません』と答えると、『おれは行橋だ、父が町長、母が婦人会長をしとる。君のじい

さんが、父の所によく遊びに来とった。皆さん、ご家族はお元氣？。おれは豊津中学卒で君より五期先輩や。名簿を見て懐かしく、合つて見たいと思つていた。君達は満州の牡丹江省にある関東軍に配属されることになっている。君の家族には、手紙で知らせ置くから安心しなさい。これからの満州は厳しい寒さとなるので、病氣にならぬよう気を付けなさい。また関東軍は内地の部隊とちがつて毎日の訓練が厳しいと聞いているので、これに耐えて頑張るように』、とのお言葉をいただき、感激し涙が止りませんでした。

それから出発までの一週間、毎夜消灯後ベットにアンパンを差し入れてくれました。これ等のことは、とても偶然とは思えません。「神の御業」だったかと思つています。

(以下次号)

『来週から、日曜学校の先生をお願いします。』と、大学の入試が終つてほつとしていた時、いきなり、故折滝牧師にいわれ、あわてて『ハイッ』と、おうむ返しに答えてしまったのが、昭和三七年の三月であつた。

爾来、ほとぼしる様な信仰があつた訳でもなく、子供の教育にさほど情熱を燃やした訳でもなく、自分の好き勝手に、日曜学校の話すすめていっているうちに、いつの間にか三〇年が経つていた。

今、振り返ってみると、信仰の希薄な青年時代に、よく臆面もなく、日曜学校の教師を引きうけたものだと、赤面するばかりである。

反面、子供に、神の言葉と信仰の証しを教えるからには、聖書をよく読みかつ理解しなくてはならず、一生懸命勉強せざるを得なかつたのも事実である。

その結果、今日迄続けてこれたのは、私自身の信仰が日曜学校で育くまれたおかげだと思つている。

教師になつた当初、今迄習う側にいたのが、いきなり教える

側になり、お祈り一つ満足にできなかった為、子供達から見ても、何とも頼りない教師だっただろうと思う。

ある時は、小学科の生徒が教会学校の最中にいきなり会堂の中を走り始め、一人増え、二人増えしているうちに、とうとう全員が会堂の中をグルグル走りまわり、礼拝が目茶目茶になってしまった。そのうち一人の女の子がひっくり返って鼻血を出してしまい、やっと騒ぎがおさまった。どうしてあんな騒ぎになったのか今だに良くわからない。よほど教師が頼りなかったのであろう。

その鼻血を出した少女が、藤掛よしちゃんであった。

平岡三兄弟にも手を焼いた。三人、年子であったこともあり、近くのいとこたちも当時沢山来ていたので、仲間が多く、いたずらもひどかった。お互いにケンカはする、子分のいとこ達をけしかけてはいたずらをする、礼拝が満足に先にすすめなかった。讚美歌をうたい、座ってお祈りをする段になるともういけない、前の子をくすぐる、隣の子をつねる、もうお祈りどころではない。そのころであった。礼拝中は、お祈りの時も、聖書を読む時も、最後迄立ったままで礼拝を続けた時である。

しかし、その後三人とも、日曜学校の教師になった。

折滝先生が倒れられてからの数年間も、今振り返ってみると、いい思い出であった。藤掛信男兄、山本素磨子姉、小松陽子姉

らと、教会学校だけは絶やすまいと、一生懸命頑張った。主の守りで、生徒も減りはしなかったし、毎週の金言も教師一人一人が、つたない乍ら、聖書の中から探し出し、何とか、子供に覚えさせる努力はしていた。その時、最も好きな聖言になったのが、ロマ書五章三―四の、『そは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり』である。ここは、ことある度に引申したので、目をつぶってでも話ができる。

会社の朝令でも、何度も使わせてもらった。

その後、榎本先生が来られるようになり、毎週の金言は、教えていただくことになって、随分楽になったが、今迄好き勝手に話のテーマを決めていたのが、与えられた聖言を話さなくてはならず、当初は例話がなかなかうまく結びつかず、しばらく苦労したこともあった。

夏季学級も、一度も休むことなく、ずっと続けてこれた。津屋崎教会を借りてのキャンプも、子供達とともに我々も、一緒に楽しませてもらった。

ある時、津屋崎の九大研究所の水族館迄歩いて見学に行ったが、往き帰り、余りの暑さに、みんな疲れきってしまい帰りつくやいなや、冷蔵庫のジュースに飛びついていったところ、応援に来ていただいた花田さんのおじいさんに、『昼食前にジュースを飲むとは何事だ!』と一喝され、当時小学生だった田中幸

子さんと、うらめしい思いをしたのもなつかしい。

思い出し始めると、失敗談ばかり、次から次と、走馬灯のようになり出され、まだまだ、いくら紙面があっても書き足りないくらいだ。

もう、何人の子供に聖言を伝えたであろうか。自分で教えた教会学校の卒業生の子供達が来始めている。

年令的にも、もう子供達との間の、考え方のギャップがあるのではないだろうか、心配もする時もある。しかし、主のゆるしがあれば、まだ一〇年も、二〇年も教会学校の教師を続けたいと思う。子供達の為にも、自分の為にも。

悔い改め

石田 秀子

『すると、イエスは彼らに言われた、「舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何かとれるだろう」。彼らは網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げることができなかつた。』(ヨハネ二一・六)

この聖言をいただいて店を始めて七年になりました。その間、

主が与えて下さったご用として、心から喜んでして来たかと問われた時、「はい、そうしてまいりました」とお答えする事は出来ません。目に見える所で浮き沈みし、信仰が有るのかわからない自分でもわからない状態でした。「こんなはずではなかつた、これではやって行けません、私は出来ません」と泣いて神様に訴え、毎日、したくないしと逃げた事ばかり考えていました。もっと違った仕事があるのではないかと疑ったり、又、いやこれは私に今与えられている仕事だから、私がどうにかしなければ、私が頑張らなくては、と二つの思いの間で揺れ動く心。今までの私は挫折ばかりで、これだけは何としてでもやりとげたい、成功させたい。思う事は自分の事ばかり、主にゆだねる事が出来ないで、もがき苦しんで葛藤してまいりました。これは主のみ旨ではないのではないかとまで思い上がって考え、「私は出来ませんからお店やめます」と先生にも不満を言いに行く様な不遜な者でした。

『信仰がなくては、神に喜ばれることは出来ない。』(ヘブル一一・六)、と信仰に立ちたい従いたいと思う心ばかりが先立って、実生活では、恐れと不安とあせりで、立って歩くどころかはいずれまわってまいりました。『ただ疑わないで信仰をもって願い求めなさい、疑う人は風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。そういう人は主から何かをいただけるものよ』

うに思うべきではないそんな人間は二心の者であってそのすべての行動に安定がない』。ああ心が痛む。それでも何とかと、各集會に主の憐れみで近づかせていただいて、「主に依り頼まなくては生きる事の出来ない私です。この与えられた道を自分の力では通ることが出来ません。助けて下さい」と、又、「時々刻々主の恵みが注がれているのに、いただく事が出来ないかたくな心、『人はパンだけでは生きず人は主の口から出るすべてのことばによって生きる』とあります主の聖言のダイナマイトで、心の底岩を砕いて下さい」と祈り求めながら今日まで仕事を続けさせていただきました。

「たとわしたちは不真実であっても彼は常に真実である彼は自分を偽る事ができないのである」。去年の暮、上島恵子姉からお電話をいただいた折、「姉が六年間もお店をさせていただいた事は本当に主の祝福ですね」と言われた言葉に、私は「はっ」としました。ああ本当にその通りですと、主の前に平伏し感謝をささげました。今までの、「私がしている」と言う思いを悔い改め、「主が祝福としてこれをさせて下さっています」と心から信じる事が出来ました。主は真実な方です。それ以来、主のご用として今日も主の前にさせていただく、お客さんが多くても少なくてもその事は問題ではなく、主の者として生かされ、主が共にいて私をここにおいて下さってこれをさ

せていただきますと、穏やかに信賴させていただく様になりました。苦しかった仕事が楽しく働く事が出来る様になり、何か自分では負いきれない荷物を背負っていた様な気持ちから開放され、自由になり、心が軽くなって、毎日がすっきりとした気持ちで生活させていただく様になりました。「割礼があるなしは問題ではなく、ただ新しく造られることこそ重要なのである」。新しく造りかえて下さいました。本当に私はまだまだ主を知りません。主を知る事を切に願っております。又、その主に全てをゆだね、主に依り頼む信仰を願ひ、これからも祈り求めて行きたいと思ひます。

「主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。」「わがたましいよ、主をほめよ、そのすべてのめぐみを心にとめよ。」全て主がして下さった恵みと祝福を心から感謝し、新しい心で主を喜びとし主にお従ひさせていただきますたいと願ひ一歩歩み出しました。今日まで、先生はじめ多くの聖徒方のお祈りにささえられてまいりました。どうぞ今後共、祈りにお加え下さいます様お願い致します。



小さな祈りに答え給うて

内田 松枝

『あなたがたは、こう祈りなさい。』（マタイ 六・九）

新年標語に掲げられた聖言に基づいてお言葉をいただき、日毎に祈りの生活に導かれて、主によって喜び、恐れ、感謝して、力を与えられる今日此の頃でございます。

ことごと祈り、願い、とりなし、感謝せよと。

神様は、私の小さな祈りに、くすしきみ業をもってご自身を現わして下さいました事を証させていただきます。

先日、山好きの夫が、山の会のメンバーの方々と鳥取県の大山へ登山することになりました。夫にとりましては初めての山、しかも高齢のために私は安否を気づかい、又、メンバー一同のために無事を祈らせていただきました。

小倉から夜行バスで翌朝大山へ。幸い好天に恵まれ、初めての山に心躍らせて、一足一足と踏み越えて九合目（一五〇〇米）まで辿り着いた時に、少し先に登っていた知人が夫に助けを求めて来たのでした。

一人の女生徒が倒れていました。側には、顔をきつらせた若い養護の先生が、人垣の中で狼狽しているのです。当日、

岡山県下の女子高校生が学校の行事で登山していたのでした。見れば意識もなく、すでに呼吸は停止して、揺り動かしても何の反応もなかったそうです。

登り行く山男達は、「もうこれは駄目だ」と、口々に言っただけで通り過ぎて行きました。夫は養護の先生を励まし、二人が連れ携で人工呼吸を施しました。次第に意識を取りもどし、危機を脱してゆきました。すぐに無線で学校に連絡され、救急車の手配が取られました。山の会のリーダーが生徒を背負い、夫も付き添って、登って来た難路を引き返して、救急車が待機している三合目まで下山しました。あとは米子国立病院へと一命を取り止める事が出来ました。夫は帰宅して、以上の事を話してくれました。

折角楽しみにしていた大山登山も途中から果せなくなり、偶然と職業柄、当り前の事をしたのでしたけれども、周囲の人々からは、人命救助云々……と賞賛され、目立つ事の嫌いな夫としては、不本意な旅となってしまいました。

でも私は心から神様に感謝致します。

「誇るものは、主を誇れ」

人命の救助はまさに神様のみ手の業であって、二、三人の救助者は、神様の尊いご用にあずからせていただいた幸せな人達でございます。

神様は、私共の求め願うところの一切をはるかに越えて、縁もゆかりもない人達にさえ、憐れみ深くみ心を止めて下さいました。

隠された神様の知恵、計り知れない神様のご慈愛。救助者の足がもう少し遅れていれば、脳死から死へと……。生徒の不幸は勿論のこと、学校側の責任問題として波紋が広がってゆく危機から、神様は逃れさせておられます。

信仰の浅い、視野の狭い私に、神様はこの現実を示して、生々しく迫って下さいました。

万軍の主であられる神様、又私一人の主であられる神様は、霊肉共に弱い私に、このみ業を通して、懇ろにお導びき下さいましたことを恐れ敬うのでございます。

「主を知ろう、せつに主を知ること求めよう」と祈り求めて、日々の歩みも主のみ旨を伺いつつ、心を新たにして慎しみ深くお従いすることの出来る者になりたいと願っております。

わが愛する者の声が聞える。

見よ、彼は山をとび、丘をおどり越えて来る。

わが愛する者はおもしかのごとく、

若い雄じかのようなです。

見よ、彼はわたしたちの壁のうしろに立ち、窓からのぞき、

格子からうかがっている。(雅歌二・八―九)

みなが崇められますように。

平成四・六・二七記

(編集註。内田姉のご主人は内科医師です)

伝道礼拝での証

匿名

みなさんおはようございます。

私は、今まで何回もお証しをしたことがあるのですが、救われた時の証しをとのことで少し困ってしまいました。

それは、私が神様を信じたのは子供のころで、いつどういったことで信じたのかその時がよくわからないからです。

でも今日は、思い出すまま素直にお証ししたいと思います。

私が初めて教会に行ったのは四才の頃で、母が私と妹を連れて大阪の浜寺教会と言う教会へ行きました。

母と妹と三人で初めて日曜学校に出たのですが、日曜学校の教室というか部屋に入ると、黒板にサムエルの絵が白墨で描かれていました。

そして、「わがままを捨てて人々を愛し」と、今から考えて

みますと、確か子どもさんびかだったと思いますが、歌いながらこのお遊戯を習いました。

それからしばらくは、教会へは行っていないようでしたが、小学校一年生の時、家から子供の足で四〇分の所にある堺の初芝教会に行くようになっていました。日曜学校に、一人で青色っぽい手提をさげて行き、その教会学校（その教会では、日曜学校は日曜日だけの日曜学校ではない、ということから、「教会学校」と呼んでいました。）の校長先生に、「よく来たね」と、誉められたのを覚えています。

それから教会へ行くようになったのですが、小学校三年の冬、カゼをひいて一ヶ月程、学校も教会も休んでいました。しかし、クリスマスに皆勤賞をもらったのを覚えています。

私が確信して言えるのは、小学校五年生の時から今まで毎週確実に教会へ行っていたということですが。

私の子供の頃、母は体が弱く、三年に一回入院していました。それでクリスチャンの祖母が、母が入院することに私達の所に来て、家事をしてくれ、私と妹を育ててくれました。

教会学校から帰ると、「今日はどんな話だったの?」と教会学校の復習が出来る様、良く尋ねてくれたりしていました。

又、母が退院して家族五人になったら、食事の後、テーブルでの家族の話になるのですが、おばあちゃんを中心になって話

してくれていて、最後は必ず聖書の話になっていました。

中学一年生の頃、何もかも順調に行っている時、自分ももっと努力しなければいけないのじゃないかと、神様を信じているのに心の中が平安ではなく心に葛藤がありました。

中学二年生と三年生の間の春休み、四月三日に洗礼を受けました。それ以来、私は人一倍弱くちよつとしたことですぐ動揺するのですが、それ以外の時はいつも心が平安です。

その時から今までいろんな中を通りましたが、エレミヤ書三一章三節に、『わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた。』とありますが、本当にその聖言通りでした。

いろんな試練に会って、こんなことがあって、神様は本当にいらっしゃるのかなあ、などと思ったりすることもあります。そんな時、小学校二年生の時や、小学校五年生だったころ、母の入院中に家事を手伝い、私と妹を育ててくれた、あの、いつも喜んで生活にいそんでいたクリスチャンの祖母の姿を思い出しては、「いや、やっぱり神様はいらっしゃる」と、信仰を再び持ち直すことが出来ます。

これからも、神様に従って行こうと思っています。

私の受洗

矢 儀 説 子

わたしが受洗したのは、今年の六月七日のペンテコステ、英語の教育実習中の日曜日、しかも二三歳の誕生日を二日後に控えていた時でした。教会の会堂に洗礼槽が設置されて最初に使わせていただき、たくさんの方々に見守られて受洗出来たことは、本当に幸いでした。

わたしは今までの人生で、そんなにつらいとか苦しいとかいう経験をもっていません。これは、生まれてからこのかた、ずっと教会の屋根のもとで育てられ、神様に守られていたからですが、幸いに、ごく自然に神さまに近づくことができました。しかし、受洗を決意する以前の自分には、『洗礼』と言うことは他人事のように思われていました。若い方々が次々に受洗されるのを横目で見つつ、「自分の時はいつなんだろう」と、自分を客観視していたように思います。ただ、「みんなが受洗するから、わたしも」と言う優柔不断な動機は、絶対におかしいと思っていたので、「いつか、必ず洗礼を受けなければ」と、喜んで受ける時がくる」と信じて、その時を待つ事にしました。

しかし、期待していたような事態は、いっこうに現れてきま

ませんでした。ただ、一つ頭にひっかかっていたのは、「教会に通っている」とは言えても、ハッキリ「クリスチャン」とは言えない自分の立場でした。神様を信じて、何か越えられないハードルがあると神様に祈り、それが取りのぞかれると感謝する…。

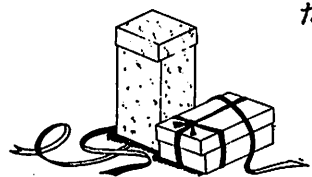
この姿勢を保ちつつも、完全に神さまのもとにいるわけではない中途半端な自分。このような思いのとき、ちょうどよいタイミングでわたしに直面したのが、大学の交換留学試験です。大学に入学する以前から、この試験に合格することが目標だったこと、大学の四年になって、留学できるできないにかかわらず、自分の進路を決めなければいけない時期に差し掛かっていたこと、叔母に、「ぜひこの機会に」と、すすめられたことから、受洗の決意が与えられました。神様に自分のこれからの生涯をお任せしようと言う素朴な、素直な気持ちになりました。

その後約四ヶ月の間、和義先生によるカウンセリングが始まりました。一対一で神様のお話を聞くことが出来たのは、このうえない感謝でした。ここで強く感じたのは、自分がひとりですべて生きているのではなく、神様によって生かされて、今この地上にいるのだということ、そして、イエス様によって、まことの神の子となり、本当に悩むことなく、全てを神様にゆだねることが出来るということです。カウンセリングをかさねることに、神様の聖言を本当に素直に受止める事が出来たのには驚

きました。

洗礼式にも証詞させていただいたように、これまで宙ぶらりんだった私も今はもうそうではなく、あの日、あの時、あの場所ですべてが新たにされました。もう、自分は一人で生きているのではない。神さまによって生かされていることを謙虚に受止められたことを心から感謝して、本当に神さまと共に生きる生活を始めたいと思います。

受洗したことにより、なんだか心が軽くなったように思います。それまで悩みやストレスがたまっていたわけではありませんが。そして心おきなく留学出来ます。これには、もう感謝、感謝です。自分が試験に合格したのではなく、神さまの御力がわたしにそうさせてくださったのだということ、あらためて認識して、八月一三日にアメリカへ出発します。遅れ馳せながら、私の受洗に至るまで、背後にあって祈っていただいた先生はじめ教会員の方々、ありがとうございました。



主のみ恵を思う

上野 米子

「時を生かそう」。日頃、教会の先生を通して、「時」には過去、現在、未来があるが、主にある者は其のうちの只一つ、現在、今と言う時以外には時がないと云うことを伺っております。生かされている其の時其の時が「時」です。午前三時、目が覚めました。これも時です。

御聖書の詩篇、九〇篇の一〇節に「われらのよわいは七〇年にすぎません。あるいは健やかであっても八〇年でしよう。」とございます。そうだ、今私にささやかれていることをペンに託して残そうと思いい机に向いました。考えますと、血縁に由る私の愛の対象者も、らっきょうの皮がはがれるように、一枚一枚ががされ只一人となりました。私を愛して下さった祖母、両親、弟妹、そして最愛の主人も今は神様の御国に帰り三年余り経ちました。生かされている息子も嫁のもの、又孫達のもとなりました。人とは何だろう、親とは何だろうと、時の経過を考えて見ますと、私には何が残っているのでしょうか。芯も無い、何もない、無以外何ものもない、らっきょうの姿と同じです。伝道の書にあるように「空の空なる」おこそばを覚えます。

其の時、私は主のおいでになることを、深く深く思わしめていただきました。長いこと教会生活を賜り、主に守られて歩ましめていただきました地上の生活も、もう僅かと言う時、真剣に考えさせられております。

今頃になって、誠にイエス様に申し訳ございません。御聖書を通して、イエス様と死の結びつきが一段とはっきりし、「只主のみ」と今の時を思わしめていただいております。

万物の創造者でいらっしゃる御在天の父なる神様、又愛とあわれみの御子イエス様、有りがたきことと、祈りを通して日々お語り申上げることを楽しみに致し、今の時を生かされております。

先日、息子の家族を九重の山に送り出して後、台風を訪問を受けました。嵐の中の只独り、初めての経験です。「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。」と主のおさとしの声をが聞こえます。教会の牧師先生、又兄姉のお見舞の電話をいただきました。主の御心を感謝致します。今朝、庭の朝顔の棚に、それはそれは数々の花が咲いております。どこに嵐が吹いたのかと言うような顔をして。この棚は息子と孫の共同作業で出来ました。白あり紫あり、ぼたん色、薄桃色、空色、紫のしぼり、緑の美しい葉を添えて精一杯自分の命をほめたたえておりました。私は思いました。私達は神様から、凡てのものに

対する善悪の判断、そのほかいろいろな心の思いを計ることの出来る靈なる生命をいただいて居りますが、地上の生活に於て、まことに主に対し、御旨を悲しめるような不甲斐のない生活をしております。それに引きかえ朝顔は、細きからだを一本の支柱に支えられ、無心に花をつけて清らかに咲いております。人よりはるかに優れた生活をしているのではないかと思われました。神様の御旨により、開き又絞む。まことに開花の生命は短かいが、一本の支柱と細き体、美しい花、この三者は一体となつて何を示しているのでしょうか。主の御旨がわかります。さるすべりの花も、きれいに散って小砂利にぬれております。

庭木の色も緑冴えて、今朝はまことに美しさを増しております。ホセア書 六章三節のおことばに

「主はあしたの光のように必ず現れいで、冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤される。」台風一過、この聖言が今朝は身にしみます。

九重の山から午前うちに帰るからとの息子の電話に、「朝顔よ、花しばむなかれ」と願いをこめ、返り道を祈り、教会出席の準備にとりかかりました。

神さまの 御わざうれしや 今朝も亦

花を かぞえる あさがおのたな

今朝は、すべてのものが雨にぬれております。安きを覚えま

す。主の御心を深く思い、ペンに託して今の時を語ることが出来たことを感謝いたします。

平成四年八月二二日

神様の約束

平野 博

私は、一九九二年五月三日に、結婚一周年を迎えました。今、イエスさまの救いにあずかっている喜びと感謝で満ちています。結婚についてですが、以前は、好きで愛する者同志であれば、周囲の人が何と言おうと、関係がないと考えていました。しかし、文子先生より、「未信者の方との結婚はダメよ」と、顔を合わせるたびに言われ、どうしてなのかと疑問に思っ、お祈りしていました。そうしているうちに、「結婚」は「神様の約束」であることを聖書の聖言を通して教えられました。

「また主なる神は言われた、『人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。』（創世記二・一八）

この聖言が与えられました。「結婚」は、神様から出たことであり、主がそなえられる伴侶は、私に一番相応しい人なのだ

と、確信を与えられました。

こう言う私は、最初からイエス様を信じるようになったのではありません。私が聖書を読むようになったのは、異端と言われている「統一教会」へ入信してからです。そこでは聖書の外にむつかし本を読まされました。一九八六年一〇月三二日に、それまで勤めてた会社を辞めて統一教会の活動にのめり込んでしまいました。暫く活動しているうちに聖書との矛盾を感じましたが、なかなか脱会することが出来ませんでした。翌八七年の元旦の未明、活動先の宇佐市内で、乗っていたワゴン車が居眠り運転のために電柱に激突するという交通事故に会い、九死に一生を得る事態でした。死んでいても、半身不随や麻痺になってもおかしくない中で、三ヶ月の入院生活で元氣を与えられたのは誠に不思議なことでした。事故に会って以来、聖書を読み、真実を求め、祈っております。その中で、次の聖言を与えられました。

「わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。」（ローマ

神様は、本当に大きな愛で私を愛してくださいましたのです。私はそれまでの自分が、誠の神様を恐れず、余りにも自分勝手に生きている結果、統一教会などに迷わされていたことに気がきました。そして、統一教会をハッキリと脱会することを決意しました。強い引止めがもちろんありましたが、皆さんのお祈りによって、統一教会を止めることが出来ました。

三ヶ月の入院の後、福岡大濠公園教会へ、母と共に通うようになりました。教会員の方々の温かい心に接し、私の知らない方々から、「よかったですね。お祈りしていました」口々に喜んで迎えられるました。私がこの教会へ導かれたのは、皆さんのお祈りによって、神様の御旨が成就したからだと確信します。まだなにもわからず、なにがなんだか分かりませんでした。が、「神様は、私たちの祈りに必ず答えてくださる方」と信じて、礼拝やその他の集会に出席させていただき、神様を求めて参りました。創世記を通して、人は神様に造られたものでありながら、我儘になって、自分勝手な道を歩み始め、神様のもとから離れ、罪を犯した者となってしまったこと。しかし、神様は今日に至るまで、ご愛と忍耐とを持って、私が神様に帰るのを待っておられ、イエス様の十字架によって、私を許してくださいました。事を信じる者とされました。

先に与えられた「ローマ人への手紙五の六一八」の聖言によって、イエス様の十字架を信じる信仰によって義としていただいていると信じ、一九八八年六月二六日、母と共に洗礼を受けさせていただき、新しい生涯に生きる者となりました。

体調も主によって整えられて来ましたので、再就職の足掛かりとして、専門学校へ通う時を与えられました。そして、一九九〇年一月、祈っていました就職先が主によってあたえられました。建設機械のレンタルという新しい仕事で、不安がありませんでした。そのとき、創世記の聖言、

「時に主はアブラムに言われた、『あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。』」（創世記一一・一一）とのアブラムへの約束の聖言を与えられました。

私はこの聖言を私への「神様の約束」と信じました。入社後、一ヶ月程たった二月の上旬、鹿児島へ長期出張を命じられました。私は、神様の約束を心の支えとして、感謝して従いました。しかも、鹿児島に滞在中も、日曜日毎に礼拝を守らせていただけた事も感謝しています。

四月に福岡へ戻って来ましたが、私の配属先が決まりません。だんだんと不安になって来ましたが、五月に、現在の勤務先を

与えられました。神様は様々な事や所を通して、多くのめぐみを与えてくださいました。

やがて、「結婚」を願うようになり、履歴書を書き、和義先生にお預けして、主の導きを待ち望みつつ、祈っておりました。そうして、一人の方を紹介していただきました。しかし、この話が主から出たことであると確信が与えられるまで暫くかかりました。「就職してまだ一年もたっていない。車を買ってローンもある。預貯金も全くない。だからまだ結婚は無理ではないか」などと、いろいろな心配がありました。

主の御旨を求めているとき、

「わたしはあなたに命じたではないか。強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」(ヨシュア一・九)との聖言を与えられました。神様には、目に見える状態がどんなであっても、何の問題でもない。神様の約束を信じて進む事にしました。「結婚」を願っていた私の祈りに、また、多くの方々の祈りに答えて結婚へと導いてくださいました。私はこれからもこの「神様の約束」を信じて、歩んで行きたいと願っています。

祈り

石田 秀子

先生が、よく各集会で「声を出して祈りなさい」とおっしゃいます。そのお導きに従って、主の前にお祈りをと願いながら、なかなか声が出ず勇氣もなくて出来ないでおりました。ある時、御霊に押し出される様に、自分でもびっくりするほどに力が与えられて主の前に感謝をささげさせていただいた時には、心も体も熱くなり(頭がかつとなり、心臓がどきどき、何をどうお祈りしたのかおぼえていない有様でしたが)、心から喜びがこみ上げて来た事を忘れる事が出来ません。と同時に、こんな小さな者が最も大切な聖日礼拝にお祈りさせていただいてよいのだろうかと恐れしました。しかし、その時は感謝せずにはおれなかったのです。その事を先生におうかがいした時、「主は祈りが上手へたではなく、その心を主は喜んで下さるのです」と教えて下さいました。こんな小さな者の祈りも、父なる神様が主イエス様のみ名のゆえに、喜んで受け入れて下さるなんて、主のあわれみと恵みをなんと感謝したらよいのでしょうか。主が喜んで下さるのであれば、一步を歩み出す事だと願い、主に力が与えられて、声を出してお祈りさせていただく様になりました。

た。お祈りさせていただいて教えていただいたことは、真すぐに心が主に向くと言う事でした。今日も主がこの私に語って下さる、「わたしはあなたを教え、あなたの行くべき道を示し、わたしの目をあなたにとめてさとすであらう」。主が私に目をとめて悟して下さいます。「ありがとうございます」と、主を待ち望む事が出来、祈る事が喜びとなりました。又、祷告の集会にもいつか加えていただきたいと願い、お祈りしていました。救われて間もない時、どの様な集会なのかわからないで出席させていただいた事があります。一人一人のためにこんなに心をこめて祈って下さっていたのかと、その時受けた感動が忘れられませんでした。又、中原光子姉から、私が救われる何年も前から、「あなたが救われる様に教会の方々に祈っていただきたいのよ」と教えられていた事を心にとめておりましたので…。私のために聖徒方の祈りが積み、その祈りに主が答えて下さって今の私があるのだと感謝しておりました。この集会が朝一〇時からになったので、思い切って出席させていただく様になりました。それも、最後までいる事は出来ず途中で帰らなければなりません、許された時間、一人でも多くの方のために（かつて私が祈っていたように）、心を一つにして祈らせていただきます。ご臨在に近づかせていただいております。小さな者の祈る祈りをも、尊い主イエス様の御血潮のゆえに、

父なる神様がお聞き下さる事を心から感謝し、「思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである」との聖言のごとく、心を低くして主にお従いさせていただきたく、又、主が信仰の歩みを導き成長させて下さる事を信じ願う今日この頃です。

OB会の世話人となりて

久保田 宮子

独身時代に務めていた時の掛長さん（八十八才）の発起人によりまして四〇年振りにOB会を行う事になり、その世話を主人が引受けました。

六〇名近く居たのですが、すでに一〇名近くは亡くなられ、半数位の方は東京、千葉、大阪等に住んでいらっしやるので、これは大変な役である、正直いって困ったものだと思います。私達は同じ職場結婚なので知らぬ顔も出来ず、主人が何かと忙しい人なので結局私に雑用が廻って来るからです。

そればかりではなく、出不精で大勢の人の所に行くとは凄く疲

れるからです。しかし、見込まれて頼まれた以上頑張つて見ようと神に祈りました。

「神には出来ない事はない」。言葉があたえられました。

人名簿を作るまでが大変でした。主人は足で、私は電話作戦。次の様なエピソードも御座居ました。

「渡辺」と言う姓が多くて二二件電話をした時、三軒目に同姓同名の方がいらっしやって、私が凄く喜んだのでその方が、この地区に三名程、同姓同名の方がいるらしいと教えて下さり、探しあてるといいですねと全く知らない方より励ましていただきました。一ヶ月かかりましたが、探し出す事が出来ました。

私達は嬉しく舞い上りました。やっぱり神様は生きて働いて下さいました。「求めよさらば与えられん」と、十字架の言葉は滅び行くものには愚かであるが救いにあずかる私達には、神の力である。誠に有難うございました。又次の不安がやって参りました。智恵もなく口下手な私にとって、クリスチャンになった事をどの様に伝えたら良いものかと迷っておりました。ある日突然に発起人の方が家に来られ、「君、クリスチャンになつた様だね。素晴らしい」とおっしゃるではありませんか。私は驚きました。主人が、以前お会いした時話してくれた様です。「何事も思い煩うなただことごとく感謝して祈りと願いを神に告げよ」、その聖言通りです。一週間後、OB会がありますが、

この様に尊い身分にされた事をあかし出来ます様、朝毎祈つて居ます。

顔型が違う様に、人それぞれ考え方も異なり色々苦勞もありましたが、大多数の方が非常に喜んで下さり、電話やお便りを通してその家庭の中まで見えた思いです。

これから残る生涯は、神と人から愛され恵みに感じて進んで行こうと思ひます。

年を重ねますと、若い時の一日が一日、一日が一月、一月が一年と言う様に飛び去って行く様です。

「今が恵みの時今が救いの日」。

一日一日を大切に充実した日々を送らせていただきたく思つて居ます。このお世話、私達夫婦にとって大いなる神のお恵みでした。感謝あるのみです。

OB会を終えて

久保田 宮子

二ヶ月前より準備して参りましたOB会もいよいよ当日を迎え、半数以上の方が集まり、遠くは千葉県より御夫婦での参

加もあり、世話人として大変嬉しく思いました。

この日の為毎朝祈って参りましたが、神様は生きて働いて下さって、朝方降っていた雨もすっかり晴れお天気までも祝福して下さり感謝で御座居ました。

何しろ四〇数年振りの再会ですので、旧姓で大きな名札を用意し、受付で一人一人胸にピンで止めました。

「アラ……」。「マア……」。言葉にはなりません……。

全く変ってない方、又それに反し名前の思い出せない方、様々です。一番先に記念撮影をし自己紹介に移りました。人前で話しの下手な私は、前から用意していた文章を読んで近況報告をし、クリスチャンになったおあかしをさせていただきました。牧師先生よりテレホン聖書を与えていただきましたので感謝して全員にお渡し致しました。一人でも多くの方に読んでいただいでキリスト教を理解して欲しいと祈る日々でご座居ます。

「神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。」今回の世話でつくづく思った事は、男女共に結婚し家庭を築き子供を育てる事によって、人並の正しい考え方が出来るのだなあ……と。我家にもいまだに嫁いでない娘が一人おりますが、これではいけないと切に思い知らされました。

聖書にも書いてあります様に「人は父母と離れその妻に合いてふたりのもの一体となるべし」。全くその通りです。

この娘にも遅まきながら人並の幸せを与えて下さいと祈って居ます。宜しくお願い致します。

世話に馴れている主人ですので、時間通り事が運んで、笑いあり涙あり想出の話は尽きず、アツと言う間に四時間が流れました。

一週間後に、ある方より招待され、当日話し足りないお喋りをしましたが、四〇数年の時を埋める事は出来ません。

神様の愛もこの様に尽きざる物だと思えます。

私共世話人にとっては、会が終了してからが大変で、会計報告や写真等々……。その中でも一番喜ばれたものは教会員の内田さんからのヒントで、出席・欠席・近況・趣味等を書いたハガキを切り抜き、寄せ書き式に一覧表にまとめたものでした。会費も充分ありましたので、四〇名全員に送って大変喜ばれました。内田さん、すばらしい事を教えて下さって本当に有難う御座居ます。

今回の世話で、たくさんの手紙、ハガキ等がたまりましたので、大きな空箱に入れて楽しみ、私の宝箱となりました。

この様に、神様の聖言も大切に心に刻み、過ちなく残る生涯を送って行かねばと思つて居ます。

「十字架の言は滅び行く者には愚かであるが救にあずかるわたしたちには神の力である。」

ひしひしと神のお恵みを感じて居る今日此頃で御座居ますが、
拙ない文と乱筆をお許し下さいませ。

下手ですが短歌を五首作りました。

待ち待ちて胸の高なり抑えつつ

友と語らい時を止めなき

いくとせの山乗り越えし友の顔

皆美しく頭下げたり

この席に集えし喜び味いつ

仲よく二人天国めざし

生き方の異なる夫婦この会で

離れし心一つとなりぬ

お会いしたき上司すでに世にはなき

ありし日偲び黙禱捧ぐ

仕事とわたし

— このたびの転職について —

松山智昭

◆このたびの私の転職についてご報告したいと思えます。私は先月（一九九二年五月）から仕事を变りました。前の仕事は就労条件などがかなり厳しいものでした。ただこれは、自分が生きて、金銭とか、地位、名誉などを第一にすれば、どんどん信仰的に苦しくなっていくものであります。

◆前職に变ったのも、先ず神様に従うことを考えたからでした。それまでの仕事が日曜日に休みではなかったので、会社の安定度など、他の条件を抜きにして、あえて聖書の聖言に従いました。

「荒野に主の道を備え、さばくに、われわれの神のために、大路をまっすぐにせよ」（イザヤ四〇・三）

とあります。そのとき私は、「主に向かって、まず第一歩を踏み出すのか、肉の欲に従って歩むのか」と探られました。「ここできちんとした態度を取らなければ、自分が苦しむ事になる」——そういう気持ちで新しい会社を選びました。

◆こうして選んだ仕事でしたが、条件はかなりきびしいもので

以上

した。ある時は、「神様に祈ってここに来たのに、どうしてこんな事になるのだろうか」と自問自答したほどです。

◆私の部屋にはN先生に書いていただいた色紙が三枚あり、そのうちの一枚は私の好きな聖言、

「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピロピ四・六)

です。振り返って見ると、それまでの私は、自分の肉の思いによって、「神様、私はこうになりたい、ああなりたいです。こうしてほしいのです」と、好き勝手な事を言っていたような気がします。その時は、与えられているものに感謝する事を忘れていました。

◆聖書の聖言に、

「主の訓練を軽んじてはいけない」(ヘブル二・五)

とあります。私は今まで真っ暗闇の中を試行錯誤して来たような気がします。しかし、振り返って見ると、それぞれの所で神様の手がしっかりと導いて下さっていたというのを感じます。両親が交通事故で亡くなってこの方、もう十何年になりますが、その間、「私の信仰は、これで大丈夫だろうか」と言うような事が何度もありました。暗闇の中で不安と恐怖の連続でした。しかし、そのポイントポイントにはきちっと主が立っておられ

ました。それは人に対して「こうだ」とか「ああ」だとか言う事ではなくて、自分自身が体でしっかりと、神様の存在を知らされたのです。人から何と言われ、自分がどんな地位にしようとも、主が私と共にいて、一対一で歩んで下さっている―どこにいてもそれを感じさせられていました。

◆それまでは、自分が一生懸命にやって来たという気持ちでしたけれども、「ちょっと待てよ」という気持ちで、気分的に力を抜き、主に生かされている事を先ず考えたところ、物凄く気が楽になりました。そのとき、「何で今まで自分は変な努力をしていたんだろう」と気付いたのです。ですからこれからも、「自分がやるんだ」という事じゃなくて、主を仰ぎつつ、一歩々々歩んで行く事が、苦しまないで、一番自然に行ける道ではないかと思っています。

◆考えてみれば、人間は明日の事が分かりません。かつての両親の事がありましたように、いつ自分は天に召されるかも知れない者です。ですから、一日々々を主と共に、悔いのない日々を歩みたいと思います。仕事はたとえ日雇いでも、アルバイトでもかまわないと思います。主が共にいて下さるなら、たとえどんな所に行っても、私は幸せであると思います。

◆これから、もし神様のみ心ならば、多くの人々の所へ遣わしていただければと思います。先ずは一歩々々、主を仰ぎ望ん

で行きたいと思います。皆さんの信仰にはまだほど遠い者ですが、まず週の始めだけでもこうして礼拝の末席に加えていただき、聖言をいただいで、これを血となし肉となして、歩いて行きたいと願っています。私は、毎朝起きる度に、聖書を一行だけでも読ませていただいています。これが私の朝食だと思っています。一日々々これを血となし肉となして歩いて行きたいと思えます。これからもどうぞよろしく願います。

(一九九二・六・二八 礼拝後のあかし)

山に登る

伊規須 泰子

◆みやまきりしまを見たいと夢見て……何年ぶりに……やっとな

念願かなって……久住登山……日帰りです。

六月、梅雨の合間、天候はますます、霧も出ず、強烈な暑さもなく、さいわいでした。

◆JRの窓から見た日田あたりの山々は、いたる所、倒木。

整理している人々の姿も見えました。

昨年九月の台風の爪跡でしょう。

自然の力のすごさを感じました。

◆豊後中村から牧の戸へのバス路線が変っていました。

途中から筋湯へ入り、温泉場をぐるぐる廻って、登山口へ出てきます。

新道も整備されましたが、昔のバス道から見えた、牛が草を食む草原や、三俣山の姿が見られないのが、少々残念でした。

◆お祈りしてよいよ登りはじめます。登り口がセメントで固められたスロープ階段になっていました。

山道の危険箇所にはロープがはられていました。

ゴロゴロ岩の道……山肌がはげて、赤土が流れ出している所……樹木がきれいに並んで倒れている所もありました。

かつての台風の爪あとでしょう。

。山は移り、丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移ることなく……(イザヤ五四・一〇)

。天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。(マタイ二四・三五)

自然は動く、はげしく移り変わる様をまざまざと見ました。

しかし、主こそわが盾と信頼するならばと、勇気も出ました。

◆山はすてきです。みやまきりしまは三分咲でした。台風の影響だそうです。

山肌の緑の間に点々とピンクが：それも美しかったけど、いつか見た、山全体ピンクの姿も見たかったと、ちょっとだけ残念でした。

◆今回はめずらしくすがもり越えをしました。岩々にていねいに道しるべのマークがつけてありました。主のみ足の跡を踏むように、ふみしめふみしめ登りました。主が支えて下さるよう感じました。案外楽に登れました。

◆すがもり小屋は簡単な寝泊りができるようになっていました。◆それから一路、長者原へと下って行きました。下りは早いものです。

◆朝六時五〇分出発―夜一〇時三〇分かえりつきました。久しぶり、楽しい山の一日でした。感謝!!

I am walking

貞 サユリ

歩く事の楽しさを見出そう。コース 自宅―教会

現在迄、約一〇回程実行したのだが、そのコース、或る日の状況を記してみたい。

二月〇日 土曜 薄曇り、朝食に御飯軽く一杯とみそ汁。食後、カプセル一錠(痛み止)、アリナミン二錠と胃腸薬を服用。服装、セーターにズボン、首にマフラー、それに手袋をする。手さげを左肩にかける。その中身は、前かけ、ゴム手袋、ハンカチと少々のお金。右手に上着を持ち、腰に万歩計をつける。さあ出発、九時ジャスト家を出る。

布製の厚いズックをはき、足もとは暖かく、身も心も軽やかに歩き始める。大畑より、鳴水市宮横の長い石段を、一気にかけ下りる。(一二四段)

黒崎中学運動場の傍、金網の張った細い人道をスタスタ歩く。中学校の生徒の「オー!オー!」(多分体育の授業中であろう)のかけ声を耳にしながら、私自身元気が出て来る。上り坂をゆっくりとした足どりで歩き、バス道路に出る。とに角真直ぐ歩き続ければ、目的は達するのだ。左右の建て売りの立派な家や、高層マンションを横目に、私はつい讚美を口ずさんでいた。人も通らず、時折、自家用車、タクシー等が、私の横を抜ける様にサッと走って行く。

♪主と共に歩む、その楽しさよ、主の踏み給いし

みあとをふみつ、ひとあし、ひとあし、イエスと共に

日々に、日々に、我は歩まん (靈感賦 一二番)

下り坂になり、小走りになる。テンポが早い歌に変わる。

♪エスの愛 エスの愛 海のごとく寄せきたる

さかえの波 我を包み 我が喜びかぎりなし

(聖歌 四六六番)

「キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さのいかにばかりなるかを知り」(エペソ三・一八)

この歌は、幼い頃母から教わり、歩きながら四番迄スムーズに歌える。あゝ何と感謝。主の愛がひしひしと身に伝わって来る。陣山中の正門前、二〇分経過、腕時計は九時二〇分。万歩計二五〇〇歩、歩調は小刻みになり、少々汗ばんで来た。マフラーを取り、手袋もはずす。上り坂になり少々疲れて来た。峠を越し、又下る。小走りに下りると、清納町の四辻の谷である。緩やかな石段を上り詰めると花尾中学校の傍だ。もう一息。呼吸が荒くなり喘ぎながら石段を登った。

「あゝ、しんど。」思わず口に出てしまい、一寸立ち止まった。ふと、傍で見知らぬおじいさんが犬をつれ、散歩していた。

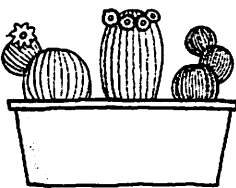
時計は九時三五分、桃園球場が見えて来た。その時急に腰骨のあたりが痛んで来た。アレ、薬を飲んだのになぜ……と一瞬思ったが、又せつせと歩き出した。球場の塀の傍を、なゝめに横ぎると前田公民館横に出る。林の中に入り、細いでこぼこ道を小走りに急いだ。公民館裏の空地で、お年寄り数人ゲートボールを楽しんでいた。

公民館前で赤信号に変わり、立ち止まって汗を拭いた。何故か、さわやかな気分であった。信号を渡り真直ぐ歩くと前田町電停だ。あと一息。又すたすたと歩き続ける。

教会到着。九時四五分、万歩計、五五〇〇歩。何故か、喜びと感謝で一杯だ。身体は疲れ、足も痛い。だが心は晴れ晴れとして、気分爽快である。歩く事は楽しい、とは言え、楽しさばかりではない。きつい、痛い、又色々な障害がつきまとう。でもその中であって、祈り、讚美しながらやりとげた事の幸福感を、しみじみとかみしめている。

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。」

(ヨハネ 一五・九)



自転車盗難事件

島山英子

◆伊規須先生に紹介していただいて、教会に通うための自転車を買い、九州工大前駅に置いていました。しかし、時間が遅くなった時は折角の自転車が使えず、西小倉駅からハイヤーで来ておりました。千円とちょっとで教会まで来る事が出来ず。そんな日は、教会から帰りに（九州工大前）駅に寄って、「自転車は大丈夫かな」と思っていて見えていました。

◆自転車置き場は（管理人がいないので）とても乱雑ですから、隅の方に指定席を決めていました。私の場合、毎日は乗らないので、腰掛けなどにビニール袋をかけていました。（タクシーで）教会に急いだりした日は、「まあ今日は大丈夫だろう」と思っていて駅に寄りませんから、かなりの日数がたってしまう事もありました。

◆そんなある日、「今日はちょっと見なければ——」と思っていて行ってみますと、荷札のようなものが下がっていました。「○日を過ぎても放置してある場合は撤去します」と言う札でした。近くの自転車にも沢山付いていました。「これは大変」と思っよく読んで見ると、私の行ったその翌日が「予告された

日」でした。「これはよかった、本当に危ないところだった」と思っ、その札を除け、綺麗に拭き掃除して帰りました。

◆ほんのこの間、行っ見ますと、屑のような自転車（誰も乗っていないような錆び付いた自転車）の山の中に、いつも綺麗にしている私の自転車が、重なるように置いてあったので、これは大変と思っ、置き場所を変えました。それまでは、駅前広場から二階の駅舎に上がる、正面の広い階段の下で、雨も掛からないから具合が良いと思っ、今度のはほかの人が余り置かないところと思っいろいろ探しました。そして自転車置き場の入口からは一番遠い所、つまり一九九号線側の一番端に置いて、綺麗に拭いて、袋もちゃんと掛けて、誰が見ても放置自転車ではない、現に乗っっている自転車らしくしました。

（その場所は道路に面してはいますが、道ばたではなく、鉄棒で歩道と仕切っ、ありますから安心と思っ、たのです）

◆するとまたある日、「あず取り除く」と札が貼っ、あるので。これもまた危機一髪、それを除けました。シートや籠にかぶせる袋の色も度々変えていました。「しょっちゅう乗っっているぞ」とみんなに見せる為です。黒や緑とか真っ赤とか黄色、色々のビニール袋をかぶせました。家のためにおいて、その都度掛け変えるのです。そんなにしてたのにまたやられました

から、「これは」と思って、また綺麗にして帰りました。

◆「これでよかった」と思ったその翌日、その場所を見ると、私の自転車がなくなっているではありませんか！ そんなに綺麗にして置いていた自転車——水曜日の第一祈禱会に行こうと思ったのに、きれいに無いのです。「これはまたどうした事かな。あんなに綺麗にして、袋も掛けかえていたのに——今度はいよいよ取られてしまった。この場所が悪かったかな」と思いました。歩道との仕切り枠を越えて持ち上げ、とって行ったらしいのです。仕方がありませんから、集会には歩いて行きました。

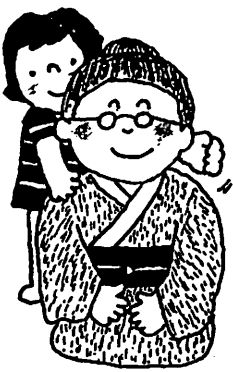
◆集会後、「先生、こういう具合でとうとう自転車が無くなりました」と言ったら、先生はお祈りして、「探して見ましょう」と、岩井さんと一緒にわざわざ駅まで来て下さいました。半分あきらめながらも、例の置いていた場所を見ると、ちゃんとそこに置いてあるではありませんか！ これには驚きました。神様がちゃんと置いて下さっている——感謝しながらよく見ると、自転車の鍵は壊したんでしょう、綺麗に無くなっています。それなのに自転車の本体はちゃんと元の所に戻してありました。

◆私はだまされたような気がして、「先生、ここに自転車がありません！」——すると先生も岩井さんもびっくりされました。「神様が、私が自転車で乗ってこないと遅くなるからと思って、

盗んだ人の心を変えて戻させて下さったのだ」と分かって感謝しました。「神様、本当に感謝いたします。あなたは先の先までご存知で、私に必要な自転車を守って下さいました。かつて『神様、どうしても自転車が要りますから、取らせないで下さい』と祈った事がありました、あなたはこんな不思議な事をして下さいました。一旦持って行った自転車を戻す人なんかいません。(そんな事をしたら、持ち主にパツタリ会って大変ですから。)みんな乗りっぱなしで、捨ててしまう人ばかりなのに、ちゃんと元に戻させて下さいました」と。

◆神様は私に必要なものを与えて、これを盗難から守って下さいました。またそういう事をした相手の人の心にも分かせて下さったと思います。まことに感謝でした。有り難うございました。

(一九九二年六月七日礼拝後のあかし)



神のみめぐみ

菊池修

私には何も無い。

地位も名誉も財産も

住むべき我が家も

平和な家庭すらもない。

だけど計り知れない

大きい大きい大きい

神の愛があり、

健康が与えられ

必要に応じて仕事が与えられ

疲れた時は憩が与えられ

慰めが与えられ

逃れる場所すらも与えられる。

「耐えられない所にはおかない」

と言われる神の愛

何と素晴らしい御恵みであろう。

只々感謝あるのみ

家はなくともこの世は仮の住い。

私は只旅人

やがては神の御側近く

天にすばらしい住いが与えられるのだ。

戸畑教会（祈の中に生かされて）

岩井 芙美子

昨年九月二三日、戸畑教会が全面改築されて、榎本先生をはじめ多くの方々の祝福をいただいて、わたしたち一同は大きな喜びと感謝をもって新しい出発を致しました。

正面の講壇に、わたしたちは神の栄光の輝きを拝して感動し、改めて戸畑教会員としての身分を胸に刻んだのでした。

思えば、一九八四年三月二三日、伊規須先生の接手礼によって、戸畑伝道所から戸畑教会へと衣替えをし、その時の喜びは、何とかしてこの戸畑の地で礼拝を持ちたいと願った長い間の願いが通じた神様の大きな賜物と、感謝につきないものでした。今回、目にも耳にも驚く程の真新しい現実を見せられたこと、もう一度この新しい一步を踏み出させていただいた事は、造っ

たからには一步も後には引く事は許さない神様のみ心であったと、誰が否定できません。父なる神様の御熱情と御子なるイエス様の御恵み、内にあって力強く働いておられる御聖霊に命をかけてこられた先生御夫妻の祈り、また近くにあり遠くにあって祈って下さった聖徒の祈りの賜物と、心から感謝するのみでございます。

何人かの人々と戸畑教会に移籍しましてから、もう七年目を迎えました。それは大きな転換でございました。喜びはまた不安にもつながって、「主よ、わたしはついて行けるでしょうか」と言うわたしに、主は、ペテロの信仰を思い起させて下さいました。「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」。こうしてわたしの一步は始まったのです。決心したわたしにさせて下さったのは、故郷の萩に行って義父の五〇周年をすませる事でした。その足でわたしは主人と分れて、しばしの別れをと京都の子供の所に行き、たまたま引越しの手伝いに二夜を楽しんで帰って参りました。

三月三〇日、八幡前田教会での最後の礼拝は、その復活の記念礼拝でありました。そしてその夜は、伝道所としての最後の集会でありました。翌日、目覚めたわたしはびっくりしました。今まで起きた事もなかった五時前に目はパッチリと開いたので

す。残っている筈の疲れもなく、すぐそのまま跳び起きて、昨夜預かったトラクトを配って歩きました。口がしきりに乾いてきました。「わたしは、渇く」とおっしゃった主のお言葉がわたしの心に一杯になりました。「どうか、この地からあなたの渇きにお答えする人ができますように」。祈りながら一軒々々と回って帰る頃、東から真つ赤な太陽がまばゆい金色の光を放って上ってきたのが今も目に焼きついております。

四日間に亘ってトラクトを配り終えて、四月四日は設立記念特別集会がもたれ、六日が教会初の礼拝となりました。

「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながら、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」

(マタイ一六・一八一―一九)

あの時の第一声は、今もよみがえりの力をもって建てあげようとして働き、召して下さった方はわたしたちを主の復活の証人として使命のために生かして今日まで支えて下さいました。またこれからも支えて下さるに違いありません。

朝八時半の日曜学校、礼拝、午后三時の第二日曜学校、伝道会、水曜日の第一、第二祈祷会、金曜会、祷告会、火曜日から土曜日までの早天祈祷会と、甘えの行動に身を置くわたしの目

には驚くものがありましたし、初めての体験でした。八幡の皆様の祈りと励ましと、野村先生御夫妻が共にあって下さった初期は、大きな励ましでした。しかし、それ以上に主のいつくしみとあわれみ、先生御夫妻のお姿であったのです。その年の感謝会で、わたしは、「先生について行きます」と言って、「わたしにはではない。主に目を留めるように」とおっしゃられた事を思い起します。朝ごとに聖言を聞いて、如何にもしてと一方では願いますが、その一方では、自分であって自分でない弱い自分に諦めの状態になったりで散々ですが、それでも忍耐と寛容の主になって取り持たされ「あなたはわたしに従ってきなさい」と始めに帰らされ、殊に祷告会では、人のために祈ることが出来なかった私は、祈る事によって肩の荷をおろし、週末は、いつも明日の為の会堂の掃除に楽しみ、礼拝の日を迎えるのでした。このわたし一人の為に主は語って下さいましたし、先生は一人の時も大勢の時も変らない備えをもって導いて下さいましたし、何と大きな恵みをもって包んで下さった事でしょう。

早天祈祷会に、久保田姉の涙を流しての真実の祈りを見、畠山姉の飾らない信仰姿勢を見、緒方兄姉の遠い所から渴きをもつての礼拝出席、内田姉の積極的な求めの姿勢、瀬野姉の純真で新鮮な祈りと、教えられる事が一杯あります。去る六月一日に畠山宏兄が受洗されたことは大きな喜びでした。日夜、祈りと

共に一切を取り仕切って下さる先生御夫妻の許にあって、教会は、次々と新しいものを産み出し成長しようとしております。

最近、一言の祈りをもってみ前に立つ事を示されての実行は、自分は何を求めべきかを一人一人が責任をもって真剣に取り組まなければならないと共に、すべてを知りつくしておられる主の前に、だれでも進んで祈る事ができるようにとの計らいに、人は新しくならなければ主を見ることができない事を教えられて、今を踏み出させていただきました。

「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大い。」

御子を惜しまずして、わたしたちすべての者のために死に渡された神様のみ心の奥に、なお秘められているみ思いが、この戸畑教会にも花開き実を結びますようにと、これからも励ましの中で祈って参ります。

「見よ、子供たちは神から賜わった嗣業であり、胎の実は報いの賜物である。」

教会の主のお言葉の内実はすばらしく「得たりと信ぜよ」とおっしゃいます。主とその恵みのお言葉に感謝し、ひたすら目にとめて歩んで、ただ主に喜ばれる事を心からの願いとして教会の徳を高める事を努めて参りたいとの願いをもって。

一九九二年七月六日 (感謝に寄せて)

収 穫

緒 方 とみ子

◆その一（新会堂の恵み）

一九九一年四月二三日（火）戸畑教会の定礎式には、残念ながら参加出来ませんでした。「白い素敵な教会が建っている」と、私の姪も言った様に、まだ新しく壊すにはもったいない様な教会でしたが、神様の恵みは測り知れません。一Fには、牧師住宅・車庫、二Fには、会堂・母子室など主人も大変喜びました。それは愛車を置く場所に気を使い、聖言も心に残らなかつた時もあつたからではないでしょうか。

※六月二日（水）新会堂の棟上げ

※八月二六日（月）新会堂へ引越し

いつもお手伝い出来なかつた私たちですが、無事に引越しもされ、神様の守りの中にある事を覚え、お祈りさせていただきました。

※九月一日（日）新会堂にて初めての礼拝

イザヤ書三〇章一九〜二六節（二〇節）

主人と一緒に祈っていた願いがかなえられ、礼拝を守りました。

※九月二三日（秋分の日）落成感謝式

この日は思いもかけない日でもありました。呼びもしない人が二人も来たからです。それは、杉山三代子姉と私の母（古野アキエ）の顔があつたからです。「偶然」という言葉はありませんが……神様のなさるわざだと教えられました。本当に、母がこの日に来るとは、私には考えられない事でしたし、いつも戸畑教会から北野へ帰る時には、実家に立ち寄る私たちですが、声をかけて誘わなくては、と切実にこの日に思いました。

「たとい主はあなたがたに悩みのパンと苦しみの水を与えられても、あなたの師は再び隠れることはなく、あなたの目はあなたの師を見る」（イザヤ書三〇章二〇節）

◆その二（礼拝の恵み）

「今は主の働かれる時です」（詩篇一一九篇二二六節）

朝ののんびりと六時に起床し、犬の世話をして八時頃より愛車（現在スリーセブンという番号）に乗せてもらい我家を出発。鳥栖IC〜八幡IC迄と北九州都市高速の戸畑高速道路を使用して、一〇時の礼拝に間に合う様に主人の運転で行きます。しかし「教会」となれば、主人はとても緊張し、まどろむ事も出来ず、早朝より??の準備をするかと思えば、とんでもない事もあります。踏み出すラインも引けず、約束という言葉も寝ると忘れるらしく、おまけに「明日なろう」という性格もプラス

されて、溜め息をつく日もあり、とうとう出掛けずサタンにやられてダウン。しかし、「一人で恵まれて来なさい」と、やさしく言われた時には、うれしい悲鳴を挙げてゐる私です。そんな時には、友人宅の訪問も考えます。

ある日、こんなプランを主人が言い出しました。それは早朝の礼拝から私が出席して、主人は夕拝（伝道会・夜一九時三〇分より）に間に合う様に行くからと言う事でした。そして一緒に車で帰宅すると言う、よく考えた礼拝の方法です。私は、これなら一番ねむたい八時頃の出発に弱い主人ですから、よい案を考えたものだと感じておりました。私は朝五時に起床し、犬の世話をしてから、いつも「西鉄電車甘木線」を利用して出掛けます。この日は、少し早目の午前六時五分発に乗り、西鉄久留米駅よりバスに乗り換えJR久留米駅へ。JR久留米駅（午前六時五〇分発）から九州工大前着（午前九時五分）。そこから歩いて戸畑教会に着きます。

※礼拝（創世記三二章一〜一九節）（ローマ人への手紙四章一七〜二五節）

※礼拝に引き続き「野村邦恵姉の感謝会」（伝道の書二二章一〜一三節）

ところが、主人は朝から夕方まで踏み出す事が出来ず、とうとうダウン。（しかし犬の世話は頼めます）。大いに喜びに声を

上げたのは私です。六年ぶりに神様からのプレゼントです。伝道会に久し振りに出席させていただき主を崇めました。一日中聖言につかっていた日です。

※夕拝（ローマ人への手紙五章一五〜一九節）

◆その三（病気の恵み）

私が「預言者ハバクク」に出会ったのは、一九九一年三月初旬でした。「緑内障」と言う病名をもらった頃ですから、もう一年前になります。その頃は、本当に希望の持てない日々で、「主よ、わたしはあなたのことを聞きました。主よ、わたしはあなたのみわざを見て恐れます。この年のうちにこれを新たにし、この年のうちにこれを知らせてください。」（ハバクク三・二）と言う祈りそのもので、極端な朝を迎えた日もあります。それは、病氣と薬のこわさも知らず、直接与えられるままの日々で、いつ下がるかわからない眼圧の不安でした。主人は職業柄、夜間に走る車のライトなどで目を悪くして通院中でしたが、私は自転車に乗る為に遠方が良く見えやすい様にとメガネを買って替えて出掛けたのが、この病気を発見する事になったきっかけです。乱視の入った度のきついメガネを掛ける様になり、これまで放っていた近視が病気を呼んだのか私には全くわかりませんが、「青そこひ」とも呼ばれるこの病氣は、自覚症状なしで、視野の一部が欠けて視神経がやられ、ついには目が見えなくな

ると言う恐ろしい病気でした。神様のあわれみと守りで随分と助けられております。目が真っ赤になったり、七転八倒の痛みはありませんが、医学書の知識による事なく、神様の恵みであることを感謝しています。恵みを忘れる事なく、病院へも出掛けています。

「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。」

(マタイ九・一二)

ある方の御主人は営業マンです。営業マンは人の御機嫌を取ったり、それは大変な仕事です。大変やり手ですから、夫婦二人して頑張ってきた店も大きくなり、個人経営者としての貫禄も備わってくると同時に、ストレスも溜ったのでしよう。そのストレスが暴飲暴食、おまけに家庭破壊につながっている様子もうかがえ、その事を聞くたびに、私の心はふさがる思いですが、イエス様の言った言葉が身にしみます。

◆その四(家庭集会の恵み)

八幡前田教会では正野宅の家庭集會に集わせていただき、樂しさを忘れられませんでした。北野に来てからも祈り求めてはいましたが、なかなか続かずじまい、二人で心合わせている緒方の家庭集會も、お互いに甘えが出ていて、物足りない感じでした。しかし神様の恵みは本当に深いものです。眼科に行く道の近所で、こちらの教会(久留米東町教会)の岡宅の家庭集

会に行く様になり、現在、私の大好きな「ローマ人への手紙」を勉強中。その時に聞いていただいたあかしです。

「彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。」(ローマ四・一八)

我家の前の御宅は、個性的な家族で、考えもつかない私たちでしたが、ある日、私が宅急便の品物を預かったところ、いくら説明しても受け取ってくれず困りました。主人に話すと、再度出掛けて行き説明したのですが、ドアを開けようともせず、ドアホン越しに、持って来た宅急便屋に返してほしいとの事です。私たちは仕方なく宅急便屋を呼び、訳を言いますと、宅急便屋も申し訳がないと言って、何度も私たちにお礼を言い、前のお宅に伺ったのです。そして訳を聞くと、「預かってくれた緒方さんから受け取った品物が、壊れていたらどうするのか」と言う事でした。私たちを信用する事なく受け取ってくれなかった事が、とても残念で信じられない事でした。しかし私方も近所の方に品物を預かっていただいた事もあります。それ程までに考えた事もなく、近頃は品物に保険がかかっている時もありますから、本当に信じられないくらい辛いのが、信じてもらえない事も大変辛い事を、家庭集會に集まった皆様にも聞いてもらいました。そして私はこの聖言が非常に心に残りました。アブラハムの様に「なおも」と希望を持ちたいと思います。以上

(一九九一〜一九九二・四 一〇年日記より)

「断腸」の記

(渋谷教会) 古 木 勝

一、はじめに

時の流れは早いもので、今を去る三〇年前、室見川上流で折滝先生によって洗礼を受けました。介添は藤掛大兄でした。暑い夏の午前でしたが、それは生涯忘れる事が出来ません。

当時、西鉄城南線の「草ヶ江」電停前の古賀薬局の裏に銀行の社宅があり、祈祷会の帰り道、何だかむしように嬉しくて、星空を仰ぎ乍ら足音も軽く家路についた事が今でも懐かしく想い出されます。福岡という土地に縁があると言うのでしょうか、長男が三菱化成に入社しましたら、最初に黒崎で約二年の実習、その後五年程東京中央研究所に居りましたが、昨年から再び黒崎工場に転勤、九州の生活をエンジョイしているようです。然し乍ら、夫妻共ノン・クリスチャンであり、何とかして、八幡前田教会への道が開かれるよう祈っております。今私は、渋谷

教会々員として、聖日礼拝を守らせていただいておりますが、同時に何時も榎本先生の説教テープをお送りいただき、みことばに恵まれて感謝であります。

又、遠くある「信仰の友」と言うべきでしょうか、福岡大濠公園教会当時より、兄貴のように親しくお交わりさせていただいて居た津留崎兄には、今もなお、困った時、苦しい時の良き相談相手になってもらっており、これ又感謝であります。

二、入院、手術の前後

さて、この度、室見川での受洗に次いで、私にとって忘れることのない体験を味わうことになりました。

六三才になる今日まで、病氣らしい病氣ひとつした事もなく、お医者様の手にかかったことは、風邪、腹痛等は別として、例えば歯の一本も抜かれた経験もないという健康体で、その面では、かなり自信過剰気味であったかも知れません。

いわんや、手術、一ヶ月の入院といった、世の中ではザラにある話も、私にとっては別世界のようでありました。それだけに、他人の痛みの判らない、ノーテンキな人間であったと言えるでしょう。

それが昨年(一九九一年)一〇月、家内からすすめられて何気なく受診した一日人間ドックで、「潜血反応」ありと言われ、胃カメラ、大腸内視鏡検査、バリウム注腸検査等の結果、『S

字結腸部分に、「非常に大きな」ポリープがあり、内視鏡的方法では切除出来ないから、切開手術の必要がある』と宣告され、チョットびっくり致しました。癌組織検査も、五段階法で「三」に当ると言われたのですが、何しろ全く自覚症状がないものですから、昨年中は、ゴルフにつきあったり、スポーツクラブで水泳をしたり、暮れには飲んだり食べたり、したい放題をし、一月初めになってやっと、お医者様の所に出向いて、「先般の件は、あと一年位様子を見てからにしたい。」と申し出ました。すると驚いたように私の顔を見、「そんな悠長なことは許されませんよ。」とのこと。

これにはいささかあわてまして、ちょうど中学時代の同期生が、横浜市内のある病院で外科医長をして居たものですから、早速相談したところ、各種データを見て、言下に、「これは直ぐ手術しなければいけないね。オレが切つてやる。」と、有無を言わず即入院となりました。

全身麻酔で約三時間半、結腸の問題箇所を両端七センチでカット、縫合したもので、腫瘍自体は茎の長さ五センチ、笠の部分直径約二・五センチ、ブロッコリー状のもので、大事に至らぬ前の早期癌であったということです。

三、与えられた聖言

手術室から戻って気が付いてみると、鼻から気管支を通過して

胃の中にはビニールチューブ、膀胱にはカテーテル、腕には常時点滴と、全く身動きならず、切開傷跡の切ない痛みと下腹部全体にわたる苦痛とで、数日間は精一杯苦しみに耐える時間となりました。昔から言われている『断腸の思い』とはかくや、と思われました。

手術後の態度は、「立派でしたよ。」と看護婦さんにはめられたはしたものの、今迄に経験したことのない連続的な苦痛には参りました。ただ、「イエス様、何とかして早くこの苦痛から解放して下さい。」と必死でお祈りするのみでした。

ところが、その苦しみの最中に、断片的にはありますが、次の聖言が頭に浮かんで来ました。それは、『遅くあらば待つべし、滞りはせじ。』でした。

早速、寝たままの状態で電話器をとり、北九州の津留崎兄に、『この聖言の箇所はどこでしょうか。』と問い合わせましたら、『旧約、ハバクク書第二章第三節』とのこと、次いで家内に電話し、旧約箇所を文語訳でメモしました。

『この黙示はなお定まれる時を俟てその終を急ぐなり。偽ならず。若し遅くあらば待つべし。必ず臨むべし。滞りはせじ。』

何時、何処でこの聖言が私の中に残されていたのか、考えても分からない、不思議な事です。勿論、ハバクク書を体系的に(?)学んだこともありません。しかし、それは神様の確実な

お約束のことばとして、私の中のどこかに刻みつけられていたのは疑いの余地はありません。

要するに、短いけれどもこのみことばがピカリと光って、私の身体全体に充満して来るような、そんな感じでありました。特に、疑いやすい我々に対して、『偽りならず』と、迫るように示して下さっている。『必ず臨むべし』、安心して待つて居なさい、と繰返しお約束を強調されている。

これは単に、肉体的な苦痛からの解放だけではなく、我々が如何なる問題、事情、境遇の中に置かれても、それ等を超えて確実に与えられる約束を示して居て下さる事を、この度、手ざわるようにして知らせていただきました。数日後、色々のチューブやパイプから自由になってベッドの上起きあがれた時、誰も居ない病室で感謝していると、自然に涙が出て来て仕方がありませんでした。

『困苦にあいたりしは、我によきことなり。これによりて我なんじの律法を学びえたり。』(詩篇一一九・七一)も、同時に心の碑にしっかり刻みつけておきたい聖言です。

一般的には、「入院、手術、あゝ、お気の毒に。」となりましようが、又とない今回の経験をとおして、神様は私に数々の「さとし」を与えて下さいました。クリスチャンとして、こんなに嬉しい、感謝すべきことはありません。心から神様を讚美する

次第です。ハレルヤ。

四、悔い改めと今後の行動指針

前記、ハバクク書第二章の二節には、『エホバ、われに答へて言いたまはくこの黙示を書きしるして、之を板の上に明らかにしるし、走りながらもこれを読むべからしめよ。』とあります。

与えられた恵みを忘れ易い私達。喉もと過ぎれば熱さを忘れ易い。この愚かな者にとって、学び得たものをしっかりと書きしるしておくのが大切であると思しますので、今後の行動指針を、次のように記述致します。

(一)どんな時にも、主の御約束を信じて行くこと。

(二)自分が、二心の者である事を認め、常に悔い改めること。

『神に近づけ、さらば神汝らに近づき給はん。罪人よ、手なきよめよ、二心の者よ、心を潔くせよ。』(ヤコブ四・八)

苦しみの最中、お祈りをしている時に、つくづく自らが二心の者であることを知らされ、悔い改めております。困った時、苦しい時、何等かの答が欲しい時、イエス様に祈るこの同じ自分が、「これも仕事」と称して、酒を飲んだり勝手な楽しみに走りたりする時は、「イエス様、今はあなたと一緒に居ていただくとチョット具合悪いですから、席を外して下さいませんか？」と、その時は気付かないけれども、そう言っ居るのに違いな

いのです。従って、職場、会社での自分、教会に於ける自分、家庭での自分、という風に、それぞれちゃんと使い分けられて、皆違うのです。

何処に本当の自分があるのか？ 聖日ごとに礼拝堂に坐っている自分というのは、単に、そこには椅子だけがあるに過ぎないのではないか？ 何としても、これからは首尾一貫して主に
お従いして行きたい。

(三)残された人生、主から与えられた使命とは何かを常に祈り求めつつ、積極的に、示された道を歩んで行きたい。

今迄の自分が、二心の者であった事が分かれれば、これからは全くライフ・スタイルが一変する筈。そして、職場で、教会で、家庭で、何をする事が神のみ旨であるかを追い求め、具体的に実行して行きたい。

(四)みことばを常にたくわえておくように努めたい。

信仰の諸先輩方が、「みことばが与えられて」と良く言われますが、何もない所に与えられる筈がない。常日頃、聖書を読み、聖言に接し、牧師先生のメッセージに耳を傾けて蓄えておけば、イザという時になって、不思議なように「おりにあう恵みとなる」聖言が与えられるのだと思います。

五、おわりに

今回、

① 珍しく、家内の言うことをすなおに聞いて、人間ドックに行ったこと、

② 執刀外科医が、奇しくも中学の同窓生であったこと、

③ あと数ヶ月も放置すれば、腸閉塞、その他の重大な障害が予想されたこと(ドクターの言)等々、今思えば、何一つ主の御恵みならざるはなし、と感謝あるのみです。

サラリーマン生活四〇有余年で、初めて与えられたこのあり余る療養の時間は、祈り、聖書を読み、黙想する事によって主に選ばれたクリスチャンとしての特権と、その喜びを十分に味わせていただいた、恵みの時でした。又、次の活動に備えての、新しい力に満たされた時間でもあります。

数年前、渋谷教会の夏期修養会でのこと、私の名前が「古木勝」なので、その時の講師であった浅草橋教会の黒木牧師が、次のように言われたのを覚えております。

「古木さんの名前はとても良い名前です、覚えやすい。『古きおのれに勝って行く』と読めますね。こんな人生、素晴らしいじゃないですか。」

今回の「断腸」を機に、もう一遍新しくされたい。

『人もしキリストに在らば、新たに造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、見よ新しくなりたり。』(一・コリント五・一七)

今回、渋谷教会藤村牧師はじめ、教会にある兄弟姉妹達の熱きお祈り、榎本牧師、津留崎兄のお祈りに支えられて退院の運びになりました事、心から感謝申し上げます。以上

続・「断腸」の記

(渋谷教会) 古木 勝

『主はあなたの呼ばれる声にに応じて、必ずあなたに恵みを施される。主がそれを聞かれるとき、直ちに答えられる。』

たとい主はあなたがたに悩みのパンと苦しみの水を与えられても、あなたの師は再び隠れることはなく、あなたの目はあなたの師を見る。また、あなたが右に行き、あるいは左に行く時、そのうしろで、「これは道だ、これに歩め」と言う言葉を耳に聞く。』(イザヤ 三〇・一九―二二)

一、社会復帰してから

四月一杯家で静養し、この五月から会社にも出られるようになり、今はもう殆ど以前のような健康を与えられて、完全に通常の生活に戻りました。津留崎兄から、その後の体験を、というおすすぬがありましたので、あの時与えられたみことばを、

今どのような形で保持しているだろうか、又、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ような状態になっていないだろうか、等を検証する意味で、その後のことを振り返ってみたいと思います。

二、私に与えられた変化

(一) 早天祈祷について

入院中からの規則正しい生活が、幸いにも家に帰ってからも続いて、早寝、早起きの習慣が定着し、この頃では、遅くても朝五時半には必ず目が覚めるようになりました。そして誰も起きていない静かな三〇分間、聖書に親しみ、みことばを味わい、短い時間ですが、祈りのひとときを過ごさせていただけようになり幸いです。本当に、「こんな素晴らしい時間があったのだろうか。」と思えるような、今迄に経験したことのない朝を与えられて居ります。

今迄、度々あった「二日酔い」の朝。会社に出掛ける時間ぎりぎり迄寝坊を決めこんでいた朝。その日の計画も、心備えもする余裕なく飛び出していた朝。これ等は主のあわれみによって、新しい光によって変えられたように感じます。

(二) 日記のこと

従って、と言うべきでしょうか、毎朝与えられたみことばをノートに書き記しているうちに、それが自然に日記となり、毎日欠かさず、小型ノートのページを開き、時に応じて読みかえ

すことの出来る、「信仰日記」的なものとなりました。

例えば冒頭のイザヤ書のみことばも、去る六月二六日（金）に拝読してこれをノートに書きとめたもので、これをそらんじることによって、何時も励まされ、力づけられ、導かれて行くように思います。この小型ノートは、毎朝、鞆の中に入れて出掛けておりますので、多分私にとって一種の「救急箱」みたいなものなのでしょう。

(三) 教会で与えられた席

しばらく欠席して居た教会に、四月第二週の聖日から再び出席しております。礼拝に参加して何処に坐ろうとかまわらないのですが、この度は、何ものかに押し出されるようにして、講壇に一番近い前の列に坐るようになった事は、我乍ら不思議でなりません。従来は、時間ギリギリに渋谷に到着する（横浜から約一時間半かかる）ものですから、大抵一番後ろの席に腰をおろしていたものでした。最前列など、何だか晴れがましく、「目立ちたがり屋」のくせに、それはとんでもない事だと考えていました。今回、「はばかりことなく」、主によって恵みをいただけるよう、最良の席が与えられ、感謝です。

(四) 会社でのこと

もともと、そそっかしい性質で、失敗が多いのですが、この間も娘に、「お父さん、もっとゆったりしたら？」トシを考え

なきや。四〇才代位のつもりで動くのはわかるわよ。だけでもう六〇才代なんだから」と言われて考えました。

「そうなのよ。病氣してから人が変わったみたい。アクセク動きまわって。私がいくら言っても聞かないんだから」と家内。そう言えば、自分はもう完全に治ったんだとばかり、家に居る時は、やれ散歩だ、水泳だ、ドライブだと席の暖まるヒマなく動いているのが、何となく焦っているように見えるのかも知れない。会社では誰も忠告してくれないので、実際は家で言われているようにバタバタしているのだろうなあ、と思いつけられませんでした。

仕事の上でも、色々な問題について、急いで結論を出したがる。「オレが決めなかつたら誰が決めるんだ。」という思い上がりから、早く決定したい、余計な所にも口を出したがる。こういう傾向を、主は現実の問題をとおして指摘して下さり、又、みことばを以って方向を示して下さい。

『あなたがたは立ち返って、落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る。』

(イザヤ三〇・一五)

早馬に乗って急いで走って行きたい時、何か重要な事項を決定しなければならぬと焦って居る時、その都度、この聖言を心の中で反すうするように教えられ、解決を神にゆだねて祈り

求めて行くよう導かれております。

三、周囲の環境

バブル崩壊後、景気動向は目まぐるしく変化し、予断を許さぬ状況で、今後、何かと苦勞の多い道程となりました。

会社経営も、何処でも同じでしょうが、当初立てた計画を大幅に修正しなければならなかったり、収益状況も非常に厳しい予測となったり、余り良いニュースはありません。

毎日、何となく心が重く、騒がしく、ふっ切れない思いがするの、今、未だ起きても居ない事に関して、あんなったらどうしよう、こうなったらどうしよう、と言った不安や、恐れ、気おくれ等々、所謂ストレスなるものでしょうか。

然し、私達は、此等の重荷を主にゆだねる事ができる。苦しみや、悩みに逢う時、主に呼ばれる事ができる。周囲の事情がどうであろうと、みことばに依り頼む時、不安を抱いたり、恐れる必要はなく、今必要なのは、問題に取組む「勇氣」なのだという事を知らされます。そして、その「勇氣」を、「知恵」を与えて下さい、と祈る時、それが必ず与えられる事を確信するのです。

先日、病院で、手術後検査の一つとして、潜血反応テストなるものを受けました。自信満々で結果を聞きましたところ、ドクターは「反応あるネ、プラス・ワンだよ」。大した事はない、

このことでしたが、未だ何処かにポリープがあって、出血しているんじゃないか等、目の前に黒い不安の要素が持ちあがって来ます。又手術を受ける事になるんじゃないか？という不安です。

然し、今回、不思議なことに、この時の不安は全く消え去って居ります。何回検査を受けても良いじゃないの。やるだけやれば。自分でどうする事も出来ないんだし、ドクターを信頼し、そして主にすべてをお委ねする。神様が全て責任をもって下さる。こんな頼もしい事はない、と感謝しました。

『すべて主を待ち望む者はさいわいである』（イザヤ三〇・

一八）

四、「喜び」について

榎本先生の説教テープを拝聴して居て、何時も感ずるのは、「喜び」をいつも語っておられる、ということ。ご自分の信仰体験を『うれしくなっちゃったんです。』と表現される。

『常に喜べ、絶えず祈れ、すべての事感謝せよ。』（一・テサロニケ五・一六一―一七）

この聖言を、常に取次いでおられ、こちらも本当に嬉しくなります。

ところで、『あなたは今、喜んでいますか？』と問われたら自分は一体何と答えるでしょうか？

神様への信頼が本物になると、本物の「喜び」があふれると言われます。まだまだ「喜び」の足りない私ではありますが、一生かかっても、この本物の「喜び」を得たいと思い、これからも信仰をもって生きたいと願っております。

同信の友への手紙

津留崎 浩 行

大変筆不精の私ですが、三〇年来の同信の友、F兄とは、折々文通しております。

長い間の信仰の友であり、気の置けない友人ですので、手紙はいつも、有りのままの信仰の語り合いになります。

友人への手紙の中味をそのまま投稿するのは、いささか場違いの感じもいたしますが、人の目を意識しない正直な信仰の告白とも思えますので、今回そのまま投稿させていただきます。今見直すと、おかしな書き方の部分も見当たりますが、そのまま出させていただきます。

御血をあがめます。

毎朝、早朝から神様との交わりの時を与えられておられることをお聞きし、主のお守りを感謝いたしております。

一日の初なりの時を、まず神様にお捧げすることができるとは、本当にお恵みだと思えます。小生は仕事の都合もあり、早朝の時間をお捧げできませんが、そのことを真剣に考えなければならぬと思えます。

神様との交わりは時間の長さではないのですが、小生ごときは、まだ短い時間ではどうも一日の歩みが自己中心になり勝ちで、一日の最初の時間のうち、できるだけ長く主との交わり（主として聖書の拝読）に時間を捧げると、あとの一日中が神様との交わりに置いていただけのように思えてなりません。

最初の時間を、じっくりとお祈りや聖書の拝読に使わせていただくことは、大変幸いなことで、それも聖霊のお力ぞえがなければできないことだと、主に祈ってやっております。それと共に、御旨には従っていくことを主の助けをいただきながらお願いしております。示された御旨に思い切ってお従いしていくと、毎日の主との交わりが非常に楽しいものとなり、喜びを絶えず注いでいただけます。御旨に従わせていただくときは、毎日が聖会です。聖霊から直接信仰を与えられるように思えます。聖書のみことが自分のものとなることを実感いたします。逆にお従いの歩みを止めると、全てが建て前の信仰になるように

思えてなりません。今、主が従うことについて、特別に教えてください。くださっているように思います。

貴兄の早朝の時が、主の御手によって一層祝福されますように、また、いつまでも主の手が、その時を続けさせて下さいませように祈っております。

汝らもしキリストと共に甦へらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリストかしこにありて神の右に坐し給ふなり。

(コロサイ三・一)

ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエスキリストを、いつも思っていないさい。

(二・テモテ二・八)

平成四年六月

F兄



納骨を感謝しまして

光 成 清 子

前田教会に入籍させていただきまして、日も浅うございますのに、厚かましく、一面識もございません主人の納骨をお願いしまして、今日その納骨をしていただけます事を誠にありがとうございます。感謝の言葉もございません。

昨晚、先生から、主人の信仰について少しお話をして下さいとお電話をいただきましたので、少しお話しをさせていただきます。

主人はユニチカに勤めて居りました。

終戦で、朝鮮から引揚げて後、大阪に三〇年位居りまして、定年で西脇に向向で一〇年位居りましたが、体を悪くして辞めました。退職しますと毎日が休日、植木の手入れ等して居りました。私は教会へ行って居りましたが、別に何も申しませんでした。教会に誘う良いチャンスと思っていましたが、祝日には国旗を掲揚し、キリスト教は外国の宗教だと思っっている人でした。大阪に居ります時は、教会に行きたくても、徹夜麻雀で朝帰りする状態で行けませんでした。会社を変りましてからは、徹

夜はしなくなりました。

時には教会に誘いながらも、耳をかそうとしませんでした。私も、祈ってはおりました。退職しまして大分たちまちしてから、主人が新聞を広げる頃に、お聖書を読み、祈りをする事にしました。初めは私も声が出ませんでした、何年かたちまちしてから、思いきって声を出して読む事にしました。そうしますと時々聞いて来ます。

マリヤの処女降誕、色々の奇蹟、病人の癒し、そんな事あるか？って。

時にはディスカッションになってしまい、後味の悪い思いも度々でした。もう止めようと思ひまして、或日祈っております時、

「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。

あなたには、わたしがついている。」

(使徒一八・九一—一〇)

の聖言が示されました。繰り返し状態でしたが、「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。だから、植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なものは、成長させて下さる神のみである」

(一・コリント三・六一—七)

私が導くのではない事を反省しましたが、聖言に勇氣を得て、聖書を読み続けました。三浦綾子さんの本、榎本保郎先生の本、分り易い「ちいろば」、羽島先生の箴言の本等読んで貰う様にしました。それから五年位たちまちして、或聖会の案内のパンフレットを配って帰って来ました時、「一人でも多い方がいいんだらう。行ってもいいよ」って言うてくれました。その時の嬉しさ、今でも忘れません。それをきっかけに教会に行く様になりました。時々聖書の事で争いになりまして、次の日曜日に行つてやらないと言っておりますが、朝になりますとちゃんと支度をして待つてました。近所の熱心なクリスチャン御夫妻が誘いに来て下さいまして、往復便乗させていただきました、教会も続けて行つて居りました。然し、反発は続いていました。先生は口答えなさらず、よく忍耐して下さいました。それから二年たち、或日先生が訪問して下さいました時、私は居なくて、部屋に入るや、「今御主人が洗礼の決心をなさいましたよ。」先生のはずんだ御声に、「えー？」と聞き返しました。嬉しさで涙が溢れて祈れませんでしたのを今思い出します。それからも反発しつつ、朝と夜の礼拝は、朝は正木先生と榎本保郎先生の一日一章を読むまでになり、読んだ信仰の本は新しい信者さんに貸して上げたりしていました。教会でも指名されました時祈っておりますが、家では中々声を出して祈つてくれませんでした。洗

礼をうけて五年目、亡くなります二ヶ月前から、漸く声を出して祈るまでになりました。入院する前日、「今日は寝てる方がいいですよ」と申しますと、礼拝すると申しまして、起き出て、ちょっと読みましたが、声が続かないから代りに読んでくれと申し、其の読みました所は、詩篇一〇三篇から

「主をほめよ 主に感謝せよ 主は恵み深くそのいつくしみはとこしえにたえることがない」

この個所でございました。それが最後に読みました所となり、その翌日、救急車で運ばれ、まさか一週間位で召されるとは夢にも思つて居りませんでした。

そこまで主人を引上げて下さいました事感謝しております。

わたしは裸で母の胎を出た。

また裸でかしこに帰ろう。

主が与え、主がとられたのだ。

主のみ名はほむべきかな。

(ヨブ一・二二)

このヨブ記の聖言を後になって慰めとしました。

分からなかった事も今では分らせていただいていると思つております。

神様は私を通して、祈る事をさせて下さり、一五年目に洗礼

をうけるまでにして下さいました。天国に、しかも前田教会の先輩の方々のお仲間入りさせていただく事が出来まして、心から感謝し、お礼を申し上げる言葉もございません。誠にありがとうございます。拙い言葉でございまして申し訳ございませんでした。これからもよろしくお願い致します。

野村さんを偲んで

広田 寿

野村さんが、九月九日召されまして二ヶ月半、今も一緒に礼拝を守っているような身近さを覚えます。

野村さんは信者の模範ともいふべき信仰生涯を全うされました。このことは、皆さんご承知の通りでありまして、ここで申し上げるまでもありません。主のご用のために、いろいろと大きな働きをなされたことでございます。

私は、今日、その中の一つだけを申しのべて聖徒を偲び、その足跡を学びたいものと思ひます。

それは、野村さんが祈りの人であったということです。いつも教えられておりますように、祈りは信者の原動力であり、信

仰の基本であります。教会のため、ご集会のため、そして兄弟姉妹のため、よく祈っていただきました。その祈りの中に、よく引用された聖書の聖言があります。今日、もう一度、その聖言を拝読して味わいたいと思います。



哀歌三・二二―二三「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみはつきることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい。」

野村さんは、主の絶えることのないいつくしみと、つきるこ

とのないあわれみを、来る朝毎に、朝毎に新しく覚えて、今日も主に在って生かされている、あなたの真実は大きいと、感謝、讚美されたのであります。

野村さんがお召されになって、ご遺族の上に、主の慰めがありますようお祈りして参りました。奥様はじめ、ご遺族の皆さんが、さびしさの中にもよみがえりの信仰に立って、慰めと平安を与えられておられることを目のあたりにし、聖名をあがめるものであります。

ご遺族の上に、豊かなお守りがありますようにお祈りします。
(平成三年一月二四日、記念会にて)

さようなら、野村小羊先生

一九九一、九、一〇

大田 敏 夫

昨夜辛い知らせがあった。野村先生がついに遠い旅路に立たれたと。前日の信徒会で、度々病床を訪れておられる榎本先生のお話しぶりからも……、覚悟はしていたが、辛い知らせだった。先生、もうお会い出来ないのですか！。

この日、関東地方を直撃する態勢だった大型の強い台風一五号、風速五〇米の相変わらず強い勢力を保ちながら、あたかも野村先生の魂を乗せているかの様に、東へ東へと向きを変えて遠ざかっていった。先生が遠くなってしまう、先生さようなら！さようなら！。

今私は、先生のお元気な時のお写真を前に、ぶどうの木一七号を横に、先生と向かいあって一刻を過ごすことを願っています。

「わたしたちは今や神の子である。」（一・ヨハネ三・二）

新緑が美しかった五月六日のパプテスマの時、先生から乗に書いて贈っていただいた聖言です。私達にとって、これが先生の絶筆となりました。思えば、榎本先生も野村先生も揃ってお元気な時に、神様の大きなお恵みにより、この日から皆さんの仲間に入れていただき、生れ変わるこの出来たことを、改めて感謝します。神様有難うございました。本当に良い時にお導きをいただきました。

ぶどうの木一七号に、「奇蹟の神の恵み」と題してお証しされた時、先生は「現在七七才と四ヶ月と相成りまして……」と喜寿の祝福を感謝されました。私も後一年でその時の先生と並びます。幸い私には、まだ健康な肉体の恵みをいただいております。天国の偉大な野村先生に代わることは到底出来ないに

しても、これからの人生を少しでも皆さんのお役に立ちたいないと、心からお誓いします。どうか先生、天国から愛の手を差し延べていただいて、後に続くこのより小さな小羊たちをお導き下さい。

よくもこんな小さい者が

野村先生は常にこの言葉をもって自分を低くされておられました。拝見している「ぶどうの木」にも随所に出て来ます。

「よくもこんな小さい者を」「こんな罪深い者を、又病みほうけた者を」「実に虫に等しい者が」……と。

二一才の若さで、イエス様に出会われてから六〇年、心を尽くし、精神を尽くして、ただ一途に神様に仕えてこられた先生の本当の姿をこのお言葉の中に見ることが出来ます。

日曜礼拝で、何時も最前列の席で静かにメモを取られる時の先生の姿は確かに小さく見えました。しかし、お祈りをされる時の先生のお声は本当に力がありました。賛美歌を歌われるそのお声は、喫驚する程張りのあるバリトンでした。み霊の働きによるものか、先生の信仰の強さがその様に先生を変えさせるのか、小さい者と常に謙遜される先生も、私達には本当に大きく偉大な小羊に見える先生でした。

モーセのごとく雄々しく

先日、原田さんから、映画「十戒」のビデオをお借りして、

皆で楽しく拝見しました。数多くの困難と闘ってイスラエルの民を率いて砂漠を進むモーセ、遂に神のお召しを受け、シナイ山の絶壁によじ登って、力尽き、跪くモーセに、神の光りと焰の中から轟きます。「モーセよ私の声を聞け」と。

壮重な神の声と共に、二枚の板に十戒の言葉が刻まれてゆきます。その時ひれ伏すモーセのほりの深い顔と、野村先生の細いあの慈顔とが二重写しとなって来ました。野村先生がモーセとなつて。

あなたはわたしのほかに何者をも神としてはならない。

あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。

あなたは、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。

安息日を覚えて、これを聖とせよ。

あなたの父と母を敬え。

あなたは殺してはならない。

あなたは姦淫してはならない。

あなたは盗んではならない。

あなたは隣人について偽証してはならない。

あなたは隣人の家をむさぼってはならない。

神様からこれらの戒を授けられて、モーセは又奮い立ちまし

た。前田教会にあっての野村先生も、正にモーセの如き勇将でした。しかし、主の僕モーセも、百二〇歳でモアブの地で天国に召されました。しかし、目もかすまず、気力も衰えてなかつたと聖書にあります。榎本先生の言われる通り、正に天寿を全うされて、野村先生も肉の体は瘦身鶴の如く枯れ果てながらも、心はモーセの如く勇氣凜々として、この世での使命を終えて、今日強く天国に旅立たれたことでしょう。

主のしもべモーセが死んだ後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに言われた、「……わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にあるであろう。わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない。強く、また雄々しくあれ。」

(ヨシュア一・一六)

「あなたがどこに行くにも、あなたの神、主と共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。」

(ヨシュア一・九)

勇者野村先生も、遂に天国に旅立たれました。しかし、主と共におられる、恐れてはならない、おののいてはならない、私達は主の聖言を頭の中に忘れず、今こそ一層元氣を取り戻して、あれ程可愛いがって下さった優しい野村先生を常に思い浮かべて、主に従って参りましょう。

「汝ら心に憂ることなかれ、

神を信じ、また我を信すべし」

(ヨハネ 一四・一)

先生は深い信仰と共に、本当に見られる程の名筆でした。先生の書かれる素晴らしい筆勢は、どこで修業されたものか、それとも天与のものか。一年を通して教会の講壇に掲げられているその年の標語は、味わい深い先生の字体で、一年中礼拝に出ては、これを仰いで覚悟を新たにさせられて参りました。

私達も生前の先生から多くの聖言を色紙に書いていただきました。上掲のこの聖言は、何時頃いただいたか覚えがありません。それ程遠い昔にいただき、八幡から種子島に、そして又八幡に戻っても、常に私の机の前に掲げさせていただいて、毎日毎日この聖言を見詰めることにより、苦しい時、悩む時、どれ程の勇気を与えられ、励まされたことでしょう。改めて先生への深い感謝を捧げます。この外にも多くの聖言を書いていただき、我が家のどの部屋にも先生の名筆が語りかけてくれることは、本当に感謝です。

私達だけではありません。恐らく多くの方々にも私達と同じ様に、先生の筆による聖言が、皆さんを守り、励まされておられることでしょう。

朝夕、この聖言に接する毎に、何時も身近に先生のお顔が浮

かびます。そして共に歩んで下さいます。先生はもうこれ以上年を取られることもなく、死や決別はありません。何時までも元気な先生と手を繋いで歩くことにしましょう。お願いします。

あれ程元気になられていたのに

七月三〇日、萩原に薬を貰いに行く。暑い日でした。歩いて行ったので汗ダクダクになりながら、久し振りに四階が上がって先生にお会いしました。入院されて二ヶ月近々、食事も進んで随分元気になっておられました。

「よかったですね、堤先生の方に足を向けて寝られませんか、何時頃退院されますか？」

「いや、ここは暑さ知らずですよ、涼しくなってからにしましょう。食事も美味しく、元気が出て来ました。顔色も良くなりましたでしょう。」

と退院話も出た位お元気でした。

「三時になったら家内もきますから……」

それならもう一寸ゆっくりしましょうかと思っていた所に、看護婦さんがウガイ菜の様なものを持って見えたので、お邪魔になっ
てはいけないと思い、「では今日はこれで」と奥様のこられるのを待たず失礼しました。これがお別れとなりました。

その前の六月六日、まだ入院されて二―三日目だったでしょ

うか、はじめのお見舞に上がった時、酸素吸入口を鼻にはさまれたお姿は、何とも痛々しい先生でした。本当に細い腕、細い足にびっくりしました。思わず、神様お守り下さいとお祈りしました。

それから一〇日程たって、邦子と北海道旅行をしました。六月一七日、知床五湖の森林浴コースを散歩しながら、この美味しい空気を野村先生に吸っていただきたいものだなーと二人で話し合ったのでした。

それからあんなに元氣を取り戻されて、又、再び弱さを覚えられました。総ては神様のみ旨と思っても、本当は、榎本先生や奥様の様に、もう一度お元氣になって欲しかったのでした。しかしもう愚痴はやめましょう。

何時までも、何時までも、私達の心の中に生きておられる先生です。しばらくのお別れですね、又会う日までさようなら。

平成三年九月九日、先生の御命日は、五七年前の昭和九年九月九日のサン九の日、当時一九歳の私が肋膜炎で入院した忘れることの出来ない日です。

(讚美歌 四〇五番)

神ともにしまして 行く道を守り

あめの御糧もて ちからを与えませ

また会う日まで また会う日まで

神のまもり 汝が身を離れざれ アーメン

主によって生かされる生涯の幸

野村 美恵子

一、主に感謝し、そのみ名を呼び、そのみわざをもらもろの民のなかに知らせよ。

二、主にむかって歌え、主をほめうたえ、そのすべてのくすしみみわざを語れ。

詩篇 一〇五篇一節二節

十字架の上に流された御血潮の故に、罪が許されたばかりでなく全く潔い者とし神の子として受け入れて下さっている。この神様の御愛を、主人の死を通し、いよいよ深く教え示されました。私にはとても筆舌に表わす事が出来ないのです。主人が召されて一年の記念日が目の前に参りました。私には、まだ昨日、今日と言う感じです。現実、一年間も一人暮らしをして参りましたのに、主人は居ないのだと言う感じが全くしなないのです。不思議に思えます。神の民として受け入れて下さっている主が全責任を持って、私達の生活の全てに真実の限りを尽して、守

り導いて居られる事実を味わい悟らせて下さる毎日でした。今、この最高の恵みと幸を与えて下さる主に感謝し、この一年間、私達の上になして下さった主の御計画をそのまま記させていただきます。

私達の出発 (主人の手紙より) 其の一

今晚も集会に出席された事は、僕も大変嬉しく思いました。一寸だけ電車待つ間に話してきましたが、要する所、僕としては何等の不安も心配ありません。只、僕の方が心配されている方だろうと言う事は考えていました。然し貴女の気持も十分伺ひましたので、もう何の問題もない事と私は思います。僕としては、クリスチャンのはしぐれで教会にも籍がある以上は、信者は信者との結婚をする事が本来から言へば、正しいのであって、未信者とは男女共結婚はしておりません。願うのは貴女が本当に僕の気持を理解してくれて、信仰者として、聖い正しい道に一緒に歩んでくれるならばと思つて、教会にお出るよう勧めましたが、一もなく承諾してもらつたので、大変よかつたと思つたのです。豊かな環境とか、よい事情である事も、又愛情ある事も、重大条件でしょう。而し、もう一步深く、精神的の結合と言うものは、更に重且つ大なるものだと考え教えられて居ます。それで、どうしても貴女が信仰の道へ進まれる事を、

僕は切に願うのです。そして後は、共にいそしみ励んで行く仲に、すべてを学び取る事ができるでしょう。信仰の土台により築かれた家庭こそ、強固なものであり、眞の幸福、スイートホームだと感じます。……………

其の二

今後については、色々と考えもあり、理想もあると思ひますが、前にも言った通り、貴女が聖い信仰に立って人生をスタートして呉れる事が一番の僕の望みです。信仰なくして何の希望があり得ましょう。清き土台と強き信仰なくして何ぞ眞の幸福があり得ようか。金銭でも、地位でも名誉でも此の世の快樂をもつても、此の平安と幸福とは買うことは絶対に不可能であります。お互いに助け合つて進めば、暗い時があつたにしろ、恐るる事はないのです。しっかりやりましょう。神の聖旨によりて結ばれるように切に祈つております。現実の神、生ける神は正しく我らに応え給うを深く信じます。……………

終戦の転倒した生活の中でもがき苦しんで、支柱を失つた家の様に、おし潰されてしまつても当然の私をそんな中から掘り出して、神様の光の道にスタートを切らせていただいた。エジプトの地、奴隷の生活から、モーセを立ててイスラエルの民をカナンへと導き出された主、その荒野の四〇年の旅路を思い出し、私達の四一年の生活を重ね見ます時、モーセも入る事の出

来なかった乳と蜜の流れる地、カナンの生活へ、これは御血によって贖われた者に主が与えて下さった最高の幸でした。幾多の荒野、道なき道も通りましたが、全て今日の為の食物に過ぎませんでした。

『主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。イスラエルは言え、「そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と。アロンの家は言え、「そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と。主をおそれる者は言え、「そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と。』(詩篇 一一八・一一四)

「主の聖徒の死はそのみ前において尊い。」(詩篇一一六・一五) これは主が言われた事です。私は主人という考えを離れて、只「アーメン」と感謝し讚美しております。私もそうありたいと切に願います。

入院への導き

六月二日の礼拝。人様の前では笑顔を見せてはいるが、最近はずっと早く帰りたい。人とお話しするのがもう大変なようでした。この日の礼拝が主人の最後の礼拝となりました。礼拝後、主人の隣に座って下さった堤先生が、私に「すぐ入院させ

なさい」と言われた。私も、大分前から主人のきついのがわかるので、二人で考えていました。只、どこの病院が良いのか、食事その他入院生活に対する心配もあり、祈っておりました。四日火曜日に、自分で堤先生に電話しました。堤先生はすぐ「萩原中央病院に病室も取ってあるから、三時位までに行ってください」と言われた。神様は、いつも躊躇している私達に良き時を備えて下さいます。榎本先生に祈っていただき、又二人で感謝しこれからの為に祈って、迎えに来てくれた仰一君の車で病院に参りました。病室は三階の見晴らしの良い涼しい部屋で、窓ぎわに森田さんと言う大工のお仕事の方が居られました。この方が、とても主人に良くして下さい、始めての入院生活の助けとなって下さいました。

病院での日々

◇六月四日(火)。この日は、先づレントゲンを撮ったり、血液検査があったり、主人も疲れたと思うが割合元気だった。面会時間が七時半なので、これからの生活を主の御手にゆだね、祈って別れた。今晚から私は一人で暮すことになるけど心は平安だった。

◇六月五日(水)。午前中に病院についた。酸素吸入で少しは楽になった様にも見えるが、昼食は沢山残し

ている。主治医の冬野先生に呼ばれた。「奥さんですね」。「はい」。「御主人の状態は非常にきびしい状態です。先づ血液検査の結果は、酸素と炭酸ガスの量が逆転している。普通なら意識は無いですよ。レントゲンもこんな状態ですからね」。働いてない左肺は真白、良かった右肺も黒く残っているところは半分以下位しかないので。率直に言えば絶望ですとおっしゃりたかったかも知れません。がこう言われました。

「お宅は息子さんが産業医大にお勤めですから、病院を变ろうと思われるなら今变られても良いですよ。大学なら設備も整っているし専門医も居るから…」と言われた。私は少しも迷うことなく、心で主に感謝しながら答えました。「先生、神様が主人をここに導いて下さったのですから、今更病院を变る事等全く思いません。又今後どうあっても、変っていたら良かった等、そのような事は考えませんから、今から先生が思われる通り治療を行って下さい。宜しくお願いします」。先生も少し安心なさった感じで、「そうですか、わかりました」と。「それにしても、このお年でこんな状態で、よくここまでこられましたね。私だったらもう意識不明になっていますよ」。御愛とあわれみに満ち満ちておられる主が、主人をこよなく愛して下さいている事実です。主人がいつも言っていたように、良くもここまで神様は生かして下さいました。どんなきびしい状態の中からで

も、真実求めて来る者に、家庭の生活もぎりぎりまで守って過ごさせていただき、礼拝も守らせて下さった。すばらしい主のお取扱を思い返しては、只感謝するばかりです。

「わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」(イザヤ 四六・四)

いつまでこの病院生活が続くものかわからないけれど、この先生を用いて、主が一切をなして下さい。先生、患者、家族が主にあつて信頼関係を持たせていただき、先づ感謝と喜びと平安を与えて、ここからのきびしいであろう一足を整えて下さいました。榎本先生も、早速見舞って下さりお祈りして下さいました。

◇六月九日(日)。礼拝後、美紀子の車で病院へ急いだ。今日は大変だった。暫らくお話ししているうち、何となく様子がおかしくなった。目は力なく、手足の先が冷たく心なしか紫色になっている様だった。先生は、「金曜日頃東京に出張するから留守にしますが、他の先生に頼んであるから」、と言われている。兎に角、急いでナースコール。看護婦さんが来て、朦朧としている主人のホッペをたたき。「野村さん、野村さん」と呼ぶと、やっと「ハイ」と言った。「ここがどこかわかりますか」「萩原中央病院」とロレッツが廻らないけれど答があった。「先

生の名前は「冬野先生」。私はほっとした。こんな主人を私は初めて見たから、もうだめかと思った。婦長さんが来られ、酸素を上げて、血液検査の為動脈血を取った。私達には依り頼むお方がある。主が私の心を治めて下さる。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」(ヨハネ一四・一)

皆が部屋を出たあと、そっと「お父さん、私がわかるね」と問うたら、「わかるさ、わたしの愛する人じゃないね」と、まだ少し廻りかねる口調で言った。全くすましたものである。入院して数日間、いろいろな事が起り事情が変わる。こんな事が家庭に居て起ったらどんなだったろうか。いつでも善にして善を行われる神様のみわざを讃めたたえるばかりです。門限まで状態がすっかり戻り、帰って良いと言うので、二人で祈って私は帰りました。

◇六月二〇日(月)

出張からお帰りになった冬野先生が来られた。早速呼ばれた。「昨日の検査の結果は入院の時より悪かったですよ。今が最悪だ」と言われた。「酸素を調節しながら抗生物質も変えて見ましょう。酸素も増やせば良いというものではない。増え過ぎると炭酸ガスが沈んでしまうので悪い結果になる」と言われた。私達にはむづかしい事は分らないけど、全能者なる主が共にい

て下さるからそれで良いのだ。主人がもう帰って良いよと言うので、お祈りして帰らせていただいた。夕食もそこそこに、只ひたすら祈り続けておりました。祈る外には何が出来るでしょうか。その時、六月六日木曜会のメッセージを思い起こさせていただきました。「あなたの願いは何か。国の半ばでもあなたに与えよう。」(エステル五・三)イエス様、何もいりません。只主人をお助け下さい。癒して下さい。今晚安らかに睡眠を与えて下さい……その時主は聖言を下さいました。

「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである。」(マルコ一〇・二七)

主よ誠にありがとうございます。信じます。私は安心して眠りにつかせていただきました。

◇六月二一日(火)。今日は早く病院へ行った。昨日の様子とは違って、ずい分調子が良さそう。朝食がおいしかったようだ。主が祈りに答えて下さるすばらしさ、切なる祈りに真実もって報いて下さる主の御顔を拝する様です。「お父さん、よかったですね、昨晩はもう必死の思いで祈ったから……でもこんなに元気になってると思わなかった。感謝しよう」。

「みんなが祈って下さっている事がとても良くわかる。そして今あなたがそーと手でふれたように、イエス様が僕の肩の所をそーとふれて潔めて下さるんだよ」と。

朝は看護婦さん達も忙しく出入りが多い。二人で感謝する。先生御夫妻がお見舞下さって、お祈りして下さいました。夕方、主治医の先生が来られた。「野村さん、今日は爽やかな顔してますね。今日は今までで一番良い結果ができましたよ。酸素がうまくいっているようです」。先生も安心されたようでした。

「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る。」

(イザヤ四三・一九)

主のお約束のすごい事を目で見、手でさわって、いよいよ讚美するばかりです。以後、日毎に食欲が増し、おいしく食べられるまでになしていただきました。

少し病気の事にふれます。慢性呼吸不全、平成元年を迎え、その夏から急に体力が衰え、咳がひどいため、血管が破れ、度々血痰が出るので、やはりこうした見る所に驚かされたり、心が沈んだり、弱ったり、その上肝臓も大分弱っていたそうです。でも私達には、依り頼むべき主がどんな中からでも助けて下さる。秋になると少しづつ回復し、再び海老津にも司会の御用にも立たして下さいました。各集会にも出席させて下さいました。併し、体力は急降下してゆくのが私にはわかります。JRはなるべく避け、バスを利用したり、車にしたり、兎に角、御臨在に近づきたい願いを主は支えて下さいました。平成二年の夏も同じ状態が起り、段階的に弱まって参りましたが、もう寝たき

りになっても当然な有様のなかをその年も守られ、遂に二二月二日に肋骨の骨折、主人にとってこれは大変な苦しみだったと思います。何しろ、繋がるうとする骨をゆさぶり離す様な咳、痰が出てしまつまで続く咳に、私の方が涙が出そうになる様でした。でもそんな状態からも主は祈りに答えて癒しを与えて下さいました。年だからと云って長くはかかりませんでした。そして平成三年も、数回講壇に立たせていただいた主人を思う時、私は目を見はり、驚きを持って心に讚美と感謝があふれます。主が立たせて下さらなければどうして立っていることができるでしょうか。この二年程は、もういつ倒れるだろうかと思われような日常でしたから、あの司会の讚美はどうして呼吸が続くのだろうか？不可能を可能として下さる神様の御力そのものだったと知らされます。何の力も働かない、かえって神様のおじゃまになる様な者と自分でも言っていた様に、取りたててお褒めに預かる様なものは何一つない者でした。併し、生ける主の証人として、主がお用い下さった、又全うさせて下さった事を深く感謝致します。

「このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである。」(使徒二・三二)

◇六月一五日(土)

(入院中の手記より)

昨日看護婦さんに洗髪してもらい、タライで足も洗って、とても気持ち良くなった。感謝した。そして主が弟子達の足を洗われた事を思い出し、今は全身主の清めにあずかり、主の宮に住ませ、主の家族の一員として、こんな者を受け入れて下さいました。毎日、貴い高い身分とされ、天国市民です。十字架を崇め感謝讚美です。八〇才の今日、信じて救われ六〇年の生涯の重みをしみじみ味わう毎日です。

◇八月五日(月) 午後三時

「あなたの荷を主にゆだねよ。主はあなたをささえられる。主は正しい人の動かされるのを決してゆるされない。」

(詩篇五五・二二)

この聖言を、今度の病氣と入院に際して与えて下さった。主が、今後の病状が特別な状態にある丈に、回復に向かっても、仮にそうでなくても、とにかく全部を、身も魂も心も思いも行動も、凡て主にゆだねよ、と仰るのだから、聖言には従います。教会でも榎本先生を初め、信徒の方々、子供から、特に家内には大変な重荷をかけるが、何事をおまかせしたからには、聖言の通りに歩くのだ、と自分に言い聞かせておるのである。主治医の冬野先生が言われたのは、「ようこんな状態で生きておられたね、僕だったらどうの先に死んでるよ」とのこと。そんな者が今日まで生かされた事が、神の栄光であり能力である。

三浦綾子さんがガンと戦い乍ら執筆されてるとか、神様はエコひいきされてるとの事だが、僕もその類であろう。手がふるえて十分に書けない。

六月の手記より随分読める。主人が言った、

「僕は、全部主におゆだねした。あなたの荷をゆだねよと言われるから、今からどんな事が起ころうと、又僕に不様な事があろうと、栄光を表して下さるのは主だからネ。今から僕の上に見える事が全て主の栄光だからそれで良い」。

これから主人を天の召に入れて下さるまで、全く主にゆだねる事について、主人が死をもって強烈に私に教えてくれました。一年を迎えた今日まで、主が主人を通して私に下さったこのプレゼントに日々ささえられ、喜びに変えられた毎日を何と感謝したら良いのでしょうか。

一晩をもつて掌を返す様に快方にむけて下さった主の癒しは、ずっと進んで、以来、ご飯も普通食にしていただき、お膳のものも殆ど残らない程食欲を与えて下さいました。もう家から、なるべく何も持って行かないようにしました。栄養もカロリ―も考えて作って下さるので、なるべく病院食をいただくようにしよう。主人も承知して頑張りました。七月いや八月初旬まで良い状態が続いて、廊下を歩く足どりも力強く歩けるようにな

り、この分なら九月頃には帰れるかも知れないと思いましたが、お風呂（シャワー）も、私がついてですが、入れるようになり、今まで起していたベッドも、夜眠る時は二〇度位まで倒して寝るようにしました。「おとうさん、家に帰ったら平らなベッドしかないからベッドを下げて寝る練習をしておかなければね！」と、自分もそのつもりだったようです。

主はこうして一時的であれ癒しを与えて下さいました。ここ数年見ないような食欲も与えて下さり、毎日おいしく食事が食べられました。でもお盆頃から、又少しづつ食べられなくなり、色々な症状が出て参りました。

◇八月一日（日）

『目ざめと同時に呼吸が困難な状態になって苦しかった。ひたすら主の助けを求めて、やっと点滴の頃止まった。感謝した。一日、どうも体のきつい一日だった。』（主人の日記より）

お盆の間は、外泊の患者さんが多く、病院も淋しい。こうして、日一日と弱って行き、又苦しい戦いの日々が見えて来たけれど、主人は苦しい顔はしなかった。余り話す事はできないけれど、見舞って下さる方にも子供達にも笑顔で接していた。夕食の時、「イランの国が来た」と言うので、何を言ってるのかと思うと、「イランの国」と口を閉じてしまう。「何だもういいらないの、まだ沢山残ってるよ、イランの国は困りものだね」

と笑ってしまう。痰も次第に出にくくなって来る。それだけ出す力がなくなったのだろう。でも吸引器を使う事はしませんでした。先生も、何とか自力で出す様にと、手段を尽くして下さいました。バイブレータで軽く叩いてへばりついたものはずす事から始め、吸入、点滴と、何と言っても痰を出す事が先決問題ですから、あの手この手と本当に良くして下さいました。

◇八月一八日（日）

主人の食欲は日に日に落ちてゆく。目に見えて衰弱し、トイレに行くにも支えがいる。今晚は私に泊まってくれないかと言うので、看護婦さんに許可をもらい、伝道会を欠席し、急いで仰一宅で食事を取り、一旦帰宅して泊まる準備、戸締りなどして病院へ急いだ。色々な症状に伴い手もふるえるし、尿器をこぼしたり、大変迷惑をかけたらしいそうだ。こんな事を思うと、夜の不安は病人にとって大変な事だとわかる。

今夜はやはり安心した様子で眠っていた。でも私は淋しい思いがした。いよいよ主人と別れの時が近づいた様な、時の迫るのを覚える。確実にやって来る決別の時が、実感として目の前に見える。悲しいものをこらえ、始めから結婚などしなかったらこんな悲しみは味わわないで良かったのに、また一人になったら毎日泣き暮らすかも知れない、どんなに悲しい事だろうか、一瞬の思いでしたが、頭の中がこんな思いでぐるぐると回って

いました。

「何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求を神に告げよ。」(ピリピ四・六)

◇八月二日(水)

今日から私は病院に泊まって、全面的に看護に当らせていただく事になった。おかあさんが倒れたら大変だから、たまには家で休んだら、と言う者もあるけれど、倒れるなら一緒に倒れたら良いのだと思いました。こんな時どうして家で安閑と眠れるでしょうか。側に居れるから、たとえ一、二時間でも眠れるのだと思いました。ある夜、主人が呼びました。

「お母さん、来てごらん」。私はベッドの側に寄りました。

「何ですか」。主人はしみじみ心をこめて、

「ここまで二人で一つ信仰もって来られて良かったね！ありがとう。僕はあなたに何もかも負ぶさって来たみたいだったね」と。

「そんな事言わないで、あなたが私の為にどんなに祈りつづけてくれたか、並々ならぬ祈りがあったから私はここまで来る事ができたんじゃないの。同じですよ。私達はいつも二人で一人前だったと思ってた。だから私達は二人居なければならなかったのよ。お祈りしましょう」。信仰については、いつでも主人にぶら下がっているような私でしたが、一人の人が絶対動かな

いで立っているから、本当に幾多の問題の中、困難の中を四一年間も落ちないでぶら下がらせてもらったと感謝を新たにしつつ、初めに主人がくれた二通の手紙に込められた切なる願いと信仰に対し、このように主が御旨を成就して下さった事を、このいまわの際に二人で心をあわせ、感謝の塚を建てて祈らせていただく事が出来た。これが、主人が「良かったね」、と言った最大の喜びであったと思いました。この時主は、私に別れの備えを与えて下さった様です。心が主にあって定まった、いつ何が来ても恐れない……

◇八月二日(木)

朝食後点滴が終って、私は、一寸帰宅し、暑いのでシャワーで一汗流し、何か好物でも食べさせたいと思い、やっと帰りついたとたん、病院から電話で、「きついのですぐ来るように、と本人から言付けです」と……。大急ぎで昼食を取り、刺身を買って行った。夕食に喜んで食べる事ができた。

◇八月二九日(木)

先生が訪問して下さる。たびたび見舞って下さる先生に、色々お話したかったと思うけど、きついので自分からあまりお話も出来なかった。でも一番嬉しい安らぎの時だった様です。ある時等、今お帰りになったのに、「先生に電話して来てもらって」等言った。今日はイザヤ四一・一〇の聖言をいただき、五

三一番（主人の愛歌）を讚美した。

◇八月三一日（土）

隣のベッドの方が四人部屋に移られた。婦長さんが、「一人部屋にしましょう」と言われた。もう気兼ねなく看られるので、良い環境になりました。讚美も祈りも遠慮なくできるのが最高でした。この頃は尿の出も少なく、足にむくみが出てきたので、管で取るようになりました。一寸嫌がっていたけれど、その方が案に出るからと言われると、もう子供の様にすなおに……。

◇九月一日（日）

昨晩は、めずらしく良く眠っていました。近頃は、息子の仰一も九時まで居て、何かと世話をしている。今晩も讚美歌四九四を讚美し、主人と三人で祈って、消灯になったので帰宅した。この事を主人はどんなに喜んでいた事か。たった数時間一緒に過ごし、背中をさすってやったりしているだけの事なのに。子供は大学入学と同時に親元を離れ、卒業しても最早帰る事はなく結婚してしまう。今はこんな時代かも知れないけれど、たったこれ位の事を父はどれだけ喜んだ事でしょうか。「仰ちゃんは優しくしてくれるね。背中をそっとさすってくれるのがとても上手だ」と。私は思いました。主が十字架の御愛を下さっているその御愛に対し、私達が一握もない小さな親孝行めいた心と思いを主も亦喜んで受け入れて下さるのだと。

◇九月二日（月）

朝目ざめが悪い。もう目をあけられないのかも知れないな—と思う。食事がきても、「もう食べないでも良い。イエス様だけで良いよ。食べてもいいっしょだから……」。

「でも主が与えて下さる食事だから少しでも食べよう、食べないといよいよ目もあけられなくなるよ」。お昼頃、先生が来て下さいました。讚美歌五一五を讚美し祈っていただいた。

◇九月五日（木）

主人が私に、たまらなくきついと初めて言った。衰弱しきった身体で呼吸が出来づらい。「お父さん、あなたが今どんなに大変なのか私にはよくわかります。でも私は何もしてあげられないものね。只祈る事と、背中をさすってあげる位しかできないものね！お父さん、十字架を見あげましょう。十字架で主が苦しんで下さっている。これ以上の苦しみはないと言われるから……」。この時主人は涙を流さんばかりに、

「ああ主よそうでした、申し訳ありません、悔い改めます」、としぼり出す様な声で祈り、平安を得ました。夕方冬野先生が来られ、明日からどうしても東京に行かなければならないけど、なるべく急いで帰るようにしますと、心配そうに言われた。午後九時、消燈時間が来て仰一君もお祈りして帰った。主人が急に、「お母さん、僕はもう天国に行くが、あんたはどう思うか

ね」と、急にどう思うかと言われて私も一瞬どきどきとしたけれど、あわてる事はなかった。主人のそばに行つて言いました。

「お父さん、もうお迎えが来られたの？」と。

「うん、もう来られたよ」。

「それなら私はどうする事も出来ないね。少しでも長く、まだまだ一ヶ月でも二ヶ月でも一緒に居たいけど……。でもあなたが先に行つたら私の場所も用意しておいて下さいね」。

「場所の用意をして下さるのは主だよ」。

「そうでしたね。でも主にお願ひしてあなたのそばにおれるように、私もあとから行くのだから」。ちよっぴり悲しかったけれど、何とも言い難い静かな安らぎを味わい、その晩も平安な眠りが与えられました。あとで、主人はなぜ私にどう思うかと聞いたのだろうか？又、主がどんなにしてお迎えに来られたのか私も聞いてみればよかった、など思いましたが、聞かないで良かった。主のなさるみわざは一人一人違っているのだから、主が私の口を封じ、又語らせて下さる。主人も安心したと思ひます。

◇九月六日（金）

朝はパン一切をやつと食べた。何となくぼんやりしている。もう氣力が次第に衰えていくのがわかる日々です。禱告会の前に先生が来て下さった。お祈りしていただき四九四番を讚美し、

主人も讚美とお祈りが出来たけれど、はつきりしなかった。午後、美紀さんが来てくれたので、帰つて少し休んできなさいと言ふ。風呂を使つたり、何か食べさせたいと思ふと休む時間は全くない。今は常時、誰か側に居る様にしています。

◇九月七日（土）

冬野先生が出張中なので、看護婦さん方がとても注意して下さっている。どうした事か、今日は急にお尻が痛くなった。朝から何回も看護婦さんと呼んで身体の位置を変えていただくが、その時だけですぐ痛くてたまらない。売店で円座を買つて当てたけれど効果がなかった。四六時中座つたままでベッドから下りる事もないので、褥瘡ができたのだろう。横になれるなら温めたりマッサージもできるのだけれど、私は祈りながらベッドに上つて、三〇数kgの身体を抱え、少し位置を変えてあげたら暫らく良かった。夜はすぐく痰が出て、疲れきつて何も食べられなかった。こうして、主人にとつても大変な一日でしたが、今晚静かな眠りを下さいました。

◇九月八日（日）

小さなパン一コやつと食べ終り、九時に点滴が始まり、看護婦さんは何回も出入りされるけれど、主人が礼拝しようと言つた。讚美歌四九四を讚美し、聖書は申命記八章を読みなさいと言ふので、私が一節から二〇節まで読ませていただき、つたな

いお祈りに心を合せてくれて、二人での礼拝を持つ事ができました。主がさせて下さったこの礼拝がほんとに最後となるとは……。(今、申命記八章を読むたびに心新たに、身の引きしまる思いで、これは主人が私と子供達に心から願った遺言であったと私も心に明記しました。)

今日は、昨日のお尻の痛さも主が取り除いて下さって、本当に安らかです。ところろ眠っていたり、多く語ることはありませんが、実に潔められた顔をしています。午後、恵二・美紀子、仰一が家族で来たので、恵三さんの車で私は一時帰った。その後、先生と岩隈姉が来て下さったとの事、昼間は大抵私が居ないので、失礼ばかりして申し訳なく、残念ですが……。

天国に帰る日

◇九月九日(月)

この二、三日は気力もなく、食事も必要としない様だ。朝は看護婦さん達が忙しく、出入りが多いので、短くお祈りして一口か二口食べた。私も、何となく無理強いはしたくなかったのと言つ通りにし、朝の色々な用事を済ませた。

「点滴が済んだら下のレストランで食事をして来るからね」、「ああ行っておいで」、と言ったけれど、アイスボックスにヨーグルトがあったのを思い出し、「ヨーグルトがあるけど食べて

みない?」と聞くと、主人は食べると言ったので、私は嬉しくて、自分の食事等どうでもと、いそいそと食べさせてあげた。それが気管の方へ行くとは思えない事でした。

「お父さん、おとうさん」、と呼び乍ら枕元のベルをおした。看護婦さんが、かねて置いてあった吸引器(痰を取る為には一度も使わなかった)を準備、冬野先生を呼んでと連絡を取る。出張だった先生も帰っておられ、すぐ来られた。私は、自分とんだ失敗をした、私が主人を追いこんだとその時たまらない思いで、「イエス様、この状態から必ず蘇生させて下さい」、と夢中で祈りました。吸引で大分白いものが出たけれど、先生は家族の方に連絡して下さいと言われた。心は騒ぎ、やはり慌てふためいている自分に、「落ち着いて」と言い聞かせながら、先づ榎本先生に電話しようと思いだ。「先生、すぐ来て下さい」。たったそれだけ言った様です。小さなポケット電話帳をバックに入れてるはずなのに見当らないのです。私が電話しないで良いのだとやっと気付かせていただき、恵子に連絡がとれたので、全ての連絡をまかせせる事ができました。先生はすぐ来て下さったので、私が主人を追いこんだと言ったら、そんな事はないと言って下さった。でも私はもう一度意識がもどる様に祈るしかなかったのです。吸引と人工呼吸を繰り返し、主治医の先生、看護婦さんが力を尽くして下さい。冬野先生が、「声をかけて

下さい」と言われた。「お父さん」と何度も呼んだけれど、返事はなかった。榎本先生も「野村さん」と何度も呼んで下さった。「讚美歌を歌いましょう」と、主人の愛歌五三一番を讚美する時、主人もかすかに口を動かし、一緒に讚美しているように思えた。確かに一緒に歌っていました。主は私のわがままな祈りを聞いて下さった。私が失敗したのでも追い込んだのでもない。主が全て導いて、最善をなして下さった事を心の底から感謝致します。お昼頃から子供達が順次着いた。吸引している姿を見て、孫の恵ちゃんが声をあげて泣きだした。午後三時頃、集中治療室に移された。主人の廻りに全員集まり見守る中で、逍遙として死に臨んで、勝利を持って主のみもとに召していた。命の灯が消えた時、何と言う静かさ、その平安な顔、細い細い身体で信仰の勝利を、皆の前に見せてくれた。又語ってくれた。その時の私の心は喜びをさえ感じたような気がしました。榎本先生が、「天寿を全うされましたね」と仰った時、本当にこれこそ天寿を全うすると言う事だと教えられ、又全く荷をゆだねた者に対する神様のお取扱いの何とすばらしい事だったかと感謝にあふれました。自分の上になる事は全て主の栄光だよと、信する者を恥かしめ給わない主のお約束、私もそのように歩かせていただきたくいと切なる願いで今日まで歩かせていただきました。

かつて肋骨を折った時、主人が言いました。

「神様は僕に良い奥さんを下さった。」「都合の良い事を言っておふろに入れてもらおう時だけでしょ」と言うのと、「そんな事ないよ、いつでもそう思っている」と、今まで聞いた事もない言葉ですが、神様の前に誓約したからには、最後にこの感謝をさせていただけることが主に喜ばれることだと改めて悟りました。

「神様はまことに、私にすばらしい信仰の人を下さっていた」と深く感謝し、見えなくなった今こそ、二人の者は一体となつた事の幸を味わって居ります。一年を過ぎた今、

「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐい取って下さる。」「ヨハネ黙示録二一・三一四」

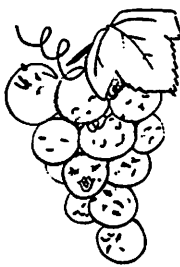
主の御手に守られ、榎本先生御夫妻、又多くの聖徒方の厚き祈りにささえられてここまで来させていただきました事を心から感謝とお礼を申し上げます。

思 い 出

上 島 仁 子

おじいちゃん、天国はどうですか。おじいちゃんが居なくなつてから、沢山いろいろな事を思い出しました。考えてみると、思ってた以上におじいちゃんとの思い出が多い事に気が付きました。小さい時から、ずっとおじいちゃんの近くにおいて、沢山の旅行ができて、幸せだな！と思います。幼稚園の頃、おじいちゃんの自転車の後ろに乗って遊びに行ったり、習字を習ったり、帰りのバスがなくていつまでも一緒に待っていてくれたり、どこを取ってもおじいちゃんは優しくかった。そして、いつも、数えきれない位私の為に祈ってくれた。そういえばおじいちゃん、後姿の写真とるの好きで、旅行の時必ず一枚はそういう写真がありましたね。私がピアノで弾いた曲、気に入ってくれてテープに取って約束していたのに、とうとう最後までわたすことできないでごめんね。今からは天国で聞いて下さい。いっぱい弾くから、讚美歌も練習するから天国で一緒に歌って下さい。おじいちゃんが好きだった、♪心のおごと♪もきれいに弾けるように頑張る。赤ちゃんの頃よく歌って寝かせてくれた、

♪主われを愛す♪もね。今にもおじいちゃんの歌声が聞こえてきそうで……私が歌うの好きなもの、おじいちゃんのおかげかもしれないですね。本当におじいちゃんの孫であった事、最高の幸せだと思います。今精一杯、ありがとうをおじいちゃんに言いたいです。おじいちゃんにもらった山のような思い出、きれいな字で書いてある、私の名前の金言入りの聖書、昔もらった世界地図、そして何と言っても、おじいちゃんとおとうさんで一生懸命考えて付けてくれた、私の名前。すべてのものを今からずっと宝物にしていきます。私もおじいちゃんと同じ天国に行ける様に、これからも神様を信じ讚美して、祈って行きたいと思えます。おじいちゃんを見習っていききたいと思えます。おばあちゃんはちゃんと私達が守っていきます。でも何よりもおばあちゃんも神様に守られているけどね。おじいちゃんほんとうにありがとう。



おじいちゃんのない敬老の日

飯田 恵

おばあちゃんの事を、毎日毎日お祈りしています。みんな、おばあちゃんが元気にしていることが他の何よりも嬉しいから、ゆっくりでもいいので元気になってね。私とかおちゃんてマドレーヌ作ったから食べて下さい。今度は塩と砂糖まぢがえなかったから美味しいと思う。私は、おじいちゃんはすごい人だなんて前から尊敬してたけれど、今回さらにおじいちゃんを今まで以上に尊敬しています。私もこれからは、どんな時でもお祈りできるようになりたいです。おじいちゃんがみんなに教えてくれたように、最後まで信仰もちつづけていたことなど、他にも沢山見習いたいと思っています。おばあちゃんもいつまでも smiling なおばあちゃんいて下さい。おじいちゃんに負けないうぐらい長生きしてね。いつまでもお祈りしています。

おばあちゃんが元気で幸せでありますように、私は毎日お祈りしています。

飯田 香

マドレーヌをお姉ちゃんと一緒に作ったので（結構うまくいったと思うけど…）食べてみてね。おじいちゃんがいなくなると寂しいと思うけど、みんながいるから大丈夫だよ。私は今年受験で忙しくなるので、たくさんは会いにいけないなっちゃうけど、いつもおばあちゃんの事をお祈りしています。これから寒くなるけど病気せず、長生きして、元気なおばあちゃんいて下さい！

平成三年九月 告別式のあと



編集後記

。皆さんからのたくさんのお証しや感謝の投稿を、長々とあためていましたが、ようやく一九号となってお届けできます。

。編集・校正のたびに、皆さんのお証しをとおして、主の恵み深きを味わい知らされ感謝です。

(N)

発行 一九九三年三月

発行者 北九州市八幡東区前田一―一〇―三

基督伝道隊八幡前田教会

牧師 榎本利三郎

発行所 基督伝道隊

八幡前田教会

福岡大濠公園教会

戸畑教会

印刷製本 有限会社 秀文社印刷